

春萩かけて	まのびてし	兄と少女は	まりにけり
夢かうつゝか	まぼろしか	思ひみだるゝ	さ夜中に
里のわらへの	ふきすさぶ	笛の音とほく	きこゆあり
とひつとはれつ	来し方を	聞きつきかれつ	ゆくすゑを
一夜かたりて	あかせども	猶言の葉や	のこるらむ
わがふる里の	こひしさに	道をいそぎて	かへらむと
野こえ山こえ	ゆきゆけば	かすみもあびき	花もさく
日敷もいくか	ふる雨に	ぬれてやつるゝ	たびごるも
家にかへりし	そのをりは	五月ごろにや	ありつらむ
山ほどゝぎす	あさきさきり	かどの立花	かをるあり
まげる夏草	ふみわけて	軒端をちかく	立ちよれば
むかしきのぶの	露散りて	袖にかゝるも	あはれあり
妻月れしあけ	うちみれば	あやしく父は	まし〜き

こゝたの驚き	いかるらむ	かゝたの嬉しさ	またいかに
父上さきくと	ねどあへば	子等もさきくと	ことふあり
ことをこまかに	開きてより	父もあはれど	ねもひけむ
兄のいましめ	ゆるしやり	妹のみさをゝ	はめにけり
親子の三人	うちつごひ	すぎにし事ども	語りあひて
くむ盃の	そのうちに	うれしきかげも	浮ぶらむ
我あやまちて	谷にねち	のぼらむすべも	あらざれば
木の實をひろひ	水のみて	ながき月日を	ねくりにか
ある日のあした	ねきいでゝ	峰のあたりを	見あくれば
あかくかゝれる	藤かつら	上に <small>マシラ</small> 猿の	あきさけぶ
あくある聲の	何とあく	こころありげに	開ゆれば
神のたすけと	よぢのぼり	始めて峰に	のぼりえつ
嬉しとあたりを	見わたせば	さきのましらは	あどもあく

木立のまげき	山かげに	蟬の聲のみ	きこゆあり
淨世のあらひと	いひあがら	うき世の常とは	いひあがら
人にあさけの	うせはて	獸にのこるぞ	あはれある
父のことばを	聞き居たる	二人のこころや	いかあらむ
うれしと兄の	たちまへば	たのしと妹も	うたふあり
千代に八千代と	いひくへ	ともによろこぶ	をりしもあれ
後の山の	まつが枝に	夕日かゝりて	たつぞあく

神典の今様

世のはじめ

大瀧光憲

天の御中に	神づまり	たけりかまくる	たまわひに
産靈の神と	あらはれて	一つのものぞ	あしませる

みむすび

大瀧光賢

いとつゝあはふ	天のはら	めをのむすびの	神わざに
うむすびまして	まるかるは	この天地の	はじめあり

くにつち

田村長柄

高天の原の	成れるのち	國さだまりて	よるひるの
わきためあはは	とよかぶし	うさふるゆゑと	まらるゆり

うさわぶら

川口固成

國いしくして

くらげあしつゝ

かたまれりしゆ

物の根さしは

天瓊矛

安部彦琴

八尋の殿を

くしびのわざゆ

國成りそめし

天の瓊矛の

いもせ

宮野直勝

天のみはしら

みとわたはすと

うましと神の

國をも神をも

姪子

廣瀬殿雄

こぞさきたちし

三歳にゐるまで

國かたあさで

流し棄つてし

あは島

栗地出琴

水泡のこりて

あれる八十島

どこよのからの

この淡島ぞ

みづの御子

宮城直享

日孃、月讀

素盞鳴の

御祖の神の

三の大神は

みそぎ

秋野重儀

よみどのけがれ

きよまはる時

神のあらたま

にぎみたま

筑紫の海に

あれましき

うけひ

樋口立琴

うけひの中に

成りませる

天つ日嗣は

日の神と

すさのみ神の

みこからし

うべ天地と

きはみあき

國むけ

西澤賢琴

十握劍トッカツルキを

浪の穂に

刺立てたまひ

千早ぶる

神をはらへば

言どひし

草木もことを

やめてけり

八十隈手

鈴木秀直

うしはき給ふ

大國を

現御神アキツミカミに

さりまつり

八十のくまでに

隠らして

幽事カミゴトえらす

大み神

みあもり

羽田俊彦

天つえるしの

うづたから

天つ日嗣の

みえるしと

よざしのまにま

天つ神

御子の命を

あもらしと

道のはじめ

川越秀春

造り固めし

國土を

あきつみ神に

さりまつり

大國主と

二かたに

世をわひたもつ

道あれり

古事

桂譽重

遠すめろぎの

神代より

傳り來ぬる

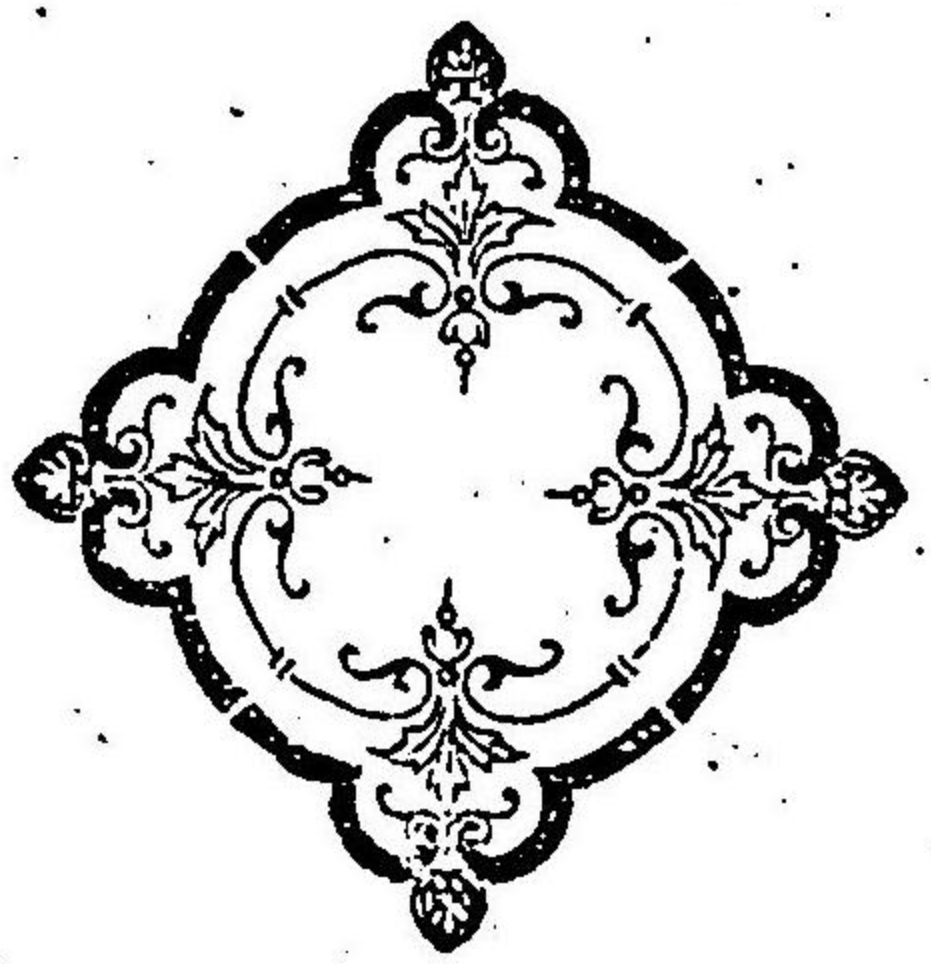
ふることを

明らめてこそ

天地の

まことの道は

えるべけれ



箏曲の歌 筑紫一名筑紫

落^{フキ}の曲 一名越天樂の曲 八橋 檢校

一段

ふきとらふも 草の名 めうがとらふも くさの名
ふきとらふも どくあり めうがあらせ たまへや

二段

はるの花の きむぎよく くわふうらくに りうくわえむ
りうくわえむの うぐひす ねみじきよくを さへつる

三段

月のまへの さらへは よらむとつる あさ風

くもぬの 雁がねは ことぢにねつる ことゑく
 四段
 長生殿の うちには 春秋を どもゆり
 不老門の まへには 月のかけ ねそし
 五段
 弘徽殿の ほそごのに たゞずむは たれく
 ねぼろ月夜の 内侍のかみ ひかる源氏の だいしやう
 六段
 たそやこの やちには さいたる門を たゞくは
 たゞくども よもあけじ よひのやくそく あければ
 七段
 羅綾の の 屏風も をぞらばるどか 越えざらむ
 たもども 引かばるどか されざらむ

梅枝の曲

平調子千鳥の曲

同

一段
 梅がえだに こ そ うぐひすは すをくへ
 風ふかば いかにせむ 花にやどる うぐひす
 二段
 花ちる里の つれづれ たえくの ことのね
 花たちばあの 袖の香に 山ほととぎす ねどづる
 三段
 ねもひねの ゆめの間 枕にちぎる あけがた
 さめてはもとの つらさにて 涙のほかは あらじお
 四段
 さ夜ふけて 鳴く千鳥 何をねもひ あかしね
 うき世をすまの うらみにて われとひとしき あみだかや

五段

まらまゆみの まゆみの そるべきは そらいで
八十の ねさゝの こひにこしを そらいた

六段

みほの松風 吹きたえて 沖つあみも あらじあ
水にうつろふ 月どもに あがめにつとく ふじさむ

心盡の曲 一名小車の曲 平調子

同

一段

こころづくしの 秋かぜに 須磨のうらわの 波まくら

衣かたしき ひどりねに 夢もむすばぬ はあよあ

二段

ふるさとを はるくと 隔てゝことに すみだ川

みやこどりに ことゝはむ 君はありや あしやと

三段

夏の夜の あかつき 夢をさます ほととぎす

まろたへに 見ゆるは 月にさらす 卵の花

四段

きりにたゞずむ をぐるま やつしてたつる をぐるま

人めまのぶの ちざりこそ ふけてねやの かよひち

五段

あすか川の 水 上を 硯の水に せきいれて

かくことの葉は つきまじや 今日もくらさむ 命かあ

六段

契りしよひの たそがれ えるべふかき そらだき

とめぬるかたの 萩の戸を ひらくや袖の うつり香

あかつき
ほもさあ
けほの
作る、今
松本操貞
の説によ
りて改む

天下太平の曲 一名雜曲の曲

同

一段

天下たいへい 長久に をさまる御代の 松かぜ
ひあづるは 千年ふる 谷のあがれに 龜あそぶ

二段

人まれぬ ちぎりは あさからぬ ものれもひ
つゝむとすれど むらさきの いろにいづるぞ はかあき

三段

はかあくも くまあき 月をいかで うらみし
どにかくに わが袖に 絶えぬ涙の ちふぐれ

四段

花の宴の ゆふぐれ ねぼろ月夜に ひくそで
さだかあらぬ ちぎりこそ ころあさく 見えけれ

五段

すみよしの 宮どころ かきあらす 琴の音
神のめぐみに あひそめて すぎしむかしを かたらむ

六段

秋の山の にしきは 立田びめや 折りけむ
まぐれふる たびごとくに いろのますぞ あやしき

薄雪の曲 一名まのくめの曲

同

一段

うらめしや わが縁 うすゆきの ちぎりか
消えにし人の かたみとて 涙ばかりや のこるらむ

二段

比翼連理の かたらひも かはればかはる 世のあらひ

さりとては うらむまじや むかしはあさけ ありしを

三段

若 紫 を 手につみ 深きこころの いろます

長さちざりと 結びしも くさのゆかりと えるべし

四段

まのまめの まがきに 露をふくむ あさがは

玉のかづら たをやかに かゝるや花の ねもかげ

五段

世々の人の あがめし 月はまことの かたみぞと

ねもへば ねもへば 涙 玉 を つらぬく

六段

よしの川の 花い こだ 棹さすひまも あらじあ

いはあみたかき 山 かげ 四方にちらす 花の香

雪晨の曲 一名榮上の曲 平調子

同

一段

雪のあしたの あらしは 梢のはあの ちるふせり

あごりをしきは とにかくに 待ちえし君の かへるさ

二段

あさましや わが身は 雲居の雁に 夕 霧 の

ねとしめられし ねもひをば 一つの世にかは わすれむ

三段

まどろめば ねもかげの えげくど みじか夜に

ほととぎす 音づれて 初音に夢ぞ さめける

四段

あがむれば いとこだに こひしき人の こひしきに

曇らばくもれ 秋の夜の 月にうらみは あらじあ

五段 峯のあらしの かよふか 谷の水の あがれか
ねがめにまこし 松風は ことのねに たがはじ

六段 葵のうへの どきめき 加茂のものみの をりから
車あらしひ つれあきは ふかきうらみ あるべし

以上、六曲を表組といふ。別に、無歌の曲六段のまらへあり。

雲上の曲 一名武藏野の曲 (是より以下八曲裏組)

八橋檢校

一段 雲のうへの あがめは ありしむかしに かはらねど
見し玉だれの うちぞたゝ あつかしや もかしき

二段

ねもしろや さみだれ 花たちばあの にほへり
はととぎす 音づれて みじか夜ふれど ねられぬ

三段

みかくに はじめより あれずはものを ねもはじ
わすれは草の 名にあれど 志のぶは人の ねもかげ

四段

ねもひあまり せきかねて 恨みぬる夜の あみだは
とこすまじや ひどりたか まくらにこひぞ ちらるゝ

五段

ひさし野に もさくれて 月をあがめて 草まくら
こひしき人を 夢に見て うたゝねの 袖ちぼる

六段

軒を遶る 點 滴 琴のねに たどへて
七 年 の 夜 の 雨 嘗てまらぬ 夢 の 夜

薄衣の曲 平調子

同

一段

敷あらぬ 身にはたゞ ねもひもあくて あれかし
人あみくの 薄ごるも 袖のあみだぞ かあしき

二段

あこがれて ねもひねの 枕にかはす ねもかけ
それかどて かたらむと 思へば夢は さめけり

三段

まらゆきの みゆきの つもる年は ふるども
あくまじや もろどもに ねみだれがみの かはばせ

四段

ひく人は それそれ あまたあれども つま琴の
もとのころろ かはらずは ことちにねちよ あきかせ

五段

かしは木の 衛門の まりをとんど けたれば
まりは枝に とまりければ うめははらり ぼろりと

六段

まりとては つれあや ひかふる君が たもとの
あやにくに あびかぬは てがひの虎の ひきつる

桐壺の曲 平調子

同

一段

さりつばの 更衣の 比翼連理の ちぎりも

さだめあき夜の ちらひとて 夢のあひだぞ かあしき

二段

みじか夜の 夢さめて 朧もかげは 夏蟲の

身よりあまる 朧もひをば いかで人に かたらむ

三段

秋の夜は ふけゆき 月はにしに かたぶく

松かぜや 波の朧と 鹿のこゑぞ さびしき

四段

道あるべせし 小君の あかだちに ひかれて

ゆくへまよふか 空蟬の 衣のかをりぞ ぬかしき

五段

たそやこよひ さ夜ふけて 柴のとぼそを たまくは

尾上れるしの 音づれか 水雞のつぐる こゑくか

六段

あをやぎを かたいたに よりてあけや うぐひす

うぐひすの ぬふてふ笠は 梅がえだの はあがさ

四季友の曲 平調子

久村 檢 技

一段

春たちくれば わが宿に まつささそむる 梅のはる

君が千とせの かざしぞと 見るものどけき 色あれや

二段

籠のまら玉 千代のかず 岩根にたつる 五月雨の

雲間すぎゆく ほととぎす たとひと聲の たとづれ

三段

月をのみ あがめても かくばかり をしまるゝ

すぐすば
しきすく
るに作る
自他の格
にかなは
れば改む

秋の夜をい
いたづらに
すぐす人こそ
つらけれ

四段

神無月
まぐれても
色かへぬ
松が枝の
縁うづめる
まら雪は
どかへりの
花あらむ

友千鳥の曲 平調子

久村 檢校

一段

満干絶えせぬ
まほの山
さしでの磯の
友千鳥
君が御代をば
いく千代と
聲もゆたかに
あきかはす

二段

日かげのどけき
かすが野に
若菜つみつゝ
よろづ代を
いはふころの
道すぐくに
神のめぐみを
いのらむ

三段

誰かはわかむ
ときはある
松のみどりも
春はあは
今ひとまほの
色見えて
あがめもふかき
このころ

四段

うつしうゑてし
庭もせに
生ひそふ竹の
枝まげみ
まげくも見ゆる
千代の影に
あるまよはひや
いつまで

五段

むかふもひろき
わたづみの
濱のまさこそ
かぞへつゝ
世のありかずに
とりあして
久しきほどを
まらばや

六段

ことぶきあれし
鶴かめも
千とせの後は
まらあくに
わかぬころに
まかせつゝ
かざりもあらぬ
ゆくすゑ

花宴の曲 平調子

石塚 檢校

一段 いくはるも ころにあは みはしの櫻 色まさり
 雲居の花は 久かたの 空ふく風も ねよぼじ
 二段 雲のうへ人 かざしきて 色をあらそふ むらさきの
 袖のかをりは うちはゆる 大内山の 夕づく日
 三段 夕ぐれの 薄がすみ たがあらす いと竹
 ねもひある 身にはたご よそのまらへも あつかし
 四段 梅つぼの あたりより 小籬のひまに もれくる
 風のかをりは よひのまの 間はいとと あやあし
 五段

弘徽殿の はそどのに たゞずむは たれたれ
 朧月夜の 内侍のかみ 光源氏の だいしやう
 六段 いととあは ふかき夜の わはれをさるも 入る月の
 ねぼろげあらぬ ちざりこそ 今身にねもひ 去らるれ

二長ノ曲 平調子

三橋檢校

一段 あしびきの いははあでしやあ あはまあづるの 羽ごろもを
 千代に一たび うちつけて あづともさらはに つきすまじ

二段 長るの浦や 春の日の あしの若葉の やはらかに
 ひるをもつれて あそぶある 春のけしきぞ ほこらしき

三段

鶴にのりし 山びどの ころにまかせ ゆきかよふ
よもぎが島を きこえしも いつもたのいせぬ どころどや

四段

このうちをらぬ ねもひでは 物かずあらず いにしへ
たかき位を ゆるされ 車に乗りし ためしあり

五段

みたらし川に すむ龜は 神代をかけて 去りぬらむ
はすの浮葉に あそぶこと 千とせの後ぞ 身はかるき

六段

河圖のうらもじ 思ひいでし わどにあらひて 今もあは
ゆふけをとへば 何ごとをも 吉にさだまる めでたさよ

雪月花の曲 平調子

同

一段

さくら卯の花 去ら菊に まがふは雪の 色あがら
まがはぬ雪の 去らがさね とむるは神の 梅が香

二段

小野の御室の つれくを 夢かどねもふ 雪の夜の
深きころに ふみわけて とひし君こそ わすれね

三段

ひさかたの 中にねふる かつらのはふ 花あらし
一えだたれも をりからし 世々につたへむ 月の名

四段

はつきあかばの 月すみて 空飛ぶかりの 聲たつる
白妙ころも うつとあり 夢のちぎりの あはれさよ

五段

花はみよし野　をはつせや　あらしの山も　れしあへて
雲とあがめし　人丸の　むかしの名こそ　うれしけれ

六段

世の中は　ものかはり　星うつれども　春の花
柳のいと　絶えやらで　くるとしくの　たのもしさ

以上、八曲を裏組といふ。別に、無歌の曲八段のまらへ、亂輪舌ミヤレリンゼツの二曲あり。

須磨の曲

平調子

(是より以下十曲中組)

八橋檢様

一段

須磨といふも　浦の名　明石といふも　浦の名
さらしあの　月とも　あがめていさや　あかさむ

あかさむ
はもさむ
へらむに
作る今一

木により
て改む

二段

春によせし　こゝろも　いつしか秋に　うつろふ
くろぎわかぎの　ませの中に　よしある花の　いろく

三段

さりくす　夜すがら　何をうらみ　すだくぞ
われもねもひに　絶えかねて　いとこころの　みだるゝに

四段

あかく　人を　うらむまじや　うらみじ
どにかくに　敷ならぬ　うき身のほごぞ　かゑしき

五段

三五夜中の　新　月　隈あきぞ　朧もしろや
千さとの外の　人までも　さぞやあがめ　あかさむ

六段

まんかうに 月さえて 車のねどの 聞ゆるは
五條あたりの あばらやの 夕がほを えるべに

明石の曲 平調子

北島 檢校

一段

ところから 名にしれふ あかしの浦の 秋のころ
月さえわたり よる波に うつろふ影の ねもしろや

二段

このころは いとどしく みやこの方の こひしきに
かゝるところの 人ごころ うきをあぐさむ 今宵かあ

三段

いつとあく めがき夜を かたりあかしの うらあくも
いかでいは根の 松の葉の ちぢりはすすも かはらじ

四段

幾夜あかしの 浦の波 よせてはかへり うきまづみ
あはれをねもふ をりからに あはれをそへて 鳴く千鳥

五段

庭の落葉か むらさめか かきあらす 琴の音か
よそにまられぬ わが袖に あまりてみるゝ 涙かあ

六段

四智圓明の あかし淵 まよひの雲も うちはれて
八重さきいづる このへの みやこにかへる うれしさよ

末松の曲 平調子

同

一段

末の松山 波こすとも かはらぬ色は 松が枝に

君が千とせの かぎりあき みぎはの池に 龜あそぶ

二段

身にまみわたる 秋のころ 月もくまあき ねやの戸に
かへるさ告ぐる くだかけの まだきに鳴くぞ うらめしき

三段

あか／＼に 今はたこ ねもひ絶えあむ とばかりを
人づてあらず いふよしも あらでこがるゝ 身ぞつらき

四段

まのぶ山 まのぶ山 あはれまのぶの 道もがあ
人のこころの 奥までも 見でややみあむ わがねもひ

五段

さよちどり 夜もすがら 鳴くはわれを とふやらむ
須磨のすまゐの ものうさに 涙をとふる こゑ／＼

六段

ちどりさあ かたみに袖を まぼりつゝ 末の松山
波こさじとは いかにいひけむ あだにありし うらみかや

空蟬の曲 平調子

同

一段

うつせみの あるかど見れど ねもかけの 影もあやあ
香をとめし さよごろも もぬけし人ぞ こひしき

二段

尋ねても あか／＼に あはでの森の あはでのみ
つれあきものは いのちにて ひどり胸をや ながすらむ

三段

よる／＼にも わがたもと ぬれつゝまなる こひごころ

繼わらむ
はもふ
るらむに
作る

うほら
むほも
さそふら
むに作る

人こそまらぬ わすられぬ 身のほどいかで わびまじ

四段

戀しゆかしと つれあくも かひあき世にも すみよしの

松はわが身の 朧もひにて わはでや年を 經ぬらむ

五段

思ひかさねて 年月を ふればむかしの まつかしく

朧もひいでたる こよひしも あみだに雨や そはるらむ

六段

とにかくに とにかくに まことのわらば わらいその

波のあふたに へだつとも よるへのあどか あからむ

四季富士の曲

平調子、中半盤井、後平調子

三橋檢技

一段この一段と序といふ

田子のうらみ うちいでゝ 見れば雲居に たかき名の

山のすがたに よつとき わくるぞわきて いひまらぬ

二段

春はかすみの わさもよい さのふの雪を それあがら

うへあき花の 色ぞとて 見るや山は ふじのね

三段

雪にたどへて 三重がさね 扇をとれる 手のうち

夏は消えて ゆふぐれの あがめをうつす ふじのね

四段

秋はさらあり つきゆき 見ぬ人にしも かつりあは

長きあがれや あかくに いはでやみあは ふじのね

五段

みふゆにあれば みやこ人 まつらむ雪を 鳥があく

調子半盤井ニカハル

あづまにすめば　あさみげに　見てこそあらめ　ふじのね
 六段この一段と敷きいふ
 時　　ま　ら　ぬ　　と　　き　　ま　　ら　　ぬ　　山本調子ニガヘルは　ふ　じ　の　ね　　い　つ　と　て　か
 か　の　こ　ま　だ　ら　に　　雪　の　ふ　る　ら　む　　か　の　こ　ま　だ　ら　に　　雪　の　ふ　る　ら　む

雪居弄齋の曲

雪居の調子

八橋檢校

一段　　月　さ　や　い　る　や　れ　の　ふ　　山　の　端　に　　は　あ　れ　く　の　　う　　き　　雪
 見　　れ　　ば　　あ　す　の　わ　か　れ　も　　あ　の　ご　と　く
 二段　　思　ひ　そ　め　た　よ　　こ　さ　む　ら　さ　さ　　袖　は　ち　し　ほ　の　　わ　　が　　涙
 さ　　も　　あ　　い　　わ　　が　　あ　　み　　だ
 三段

月さやい
るやれの
ふ山の端
は月の端
ふ山の端
山は月の
ふ山の端
るいふし
るいふし

わすれ草がなのふ　　ひともとほしや　　う　　ゑ　　て　　そ　　だ　　て　　と
 見てわすりよ　　さ　　も　　あ　　い　　見　　て　　わ　　す　　り　　よ

玉鬘の曲

半平調子の調子

三橋檢校

一段　　い　　か　　あ　　る　　す　　じ　　と　　　ゆ　　ふ　　が　　ほ　　の　　　露　　の　　ゆ　　か　　り　　の　　　玉　　か　　づ　　ら
 ひ　　か　　し　　を　　か　　け　　て　　こ　　ひ　　わ　　た　　る　　　え　　に　　し　　も　　い　　か　　で　　　淺　　か　　ら　　ぬ
 二段　　初　　音　　ゆ　　か　　し　　き　　　う　　ぐ　　ひ　　す　　の　　　す　　だ　　ち　　し　　ま　　つ　　の　　　ね　　を　　と　　へ　　ば
 谷　　の　　ふ　　る　　す　　の　　　め　　づ　　ら　　し　　く　　　春　　の　　日　　が　　け　　ぞ　　　の　　と　　け　　き
 三段　　さ　　く　　ら　　山　　吹　　　と　　り　　く　　に　　　花　　の　　ま　　が　　き　　に　　　飛　　び　　ち　　が　　ふ
 胡　　蝶　　の　　ま　　ひ　　は　　　は　　か　　あ　　く　　も　　　あ　　か　　ず　　く　　れ　　ゆ　　く　　　け　　し　　き　　か　　る

四段

こゑはせで 身をのみこがす ほたるこそ 薄きひとへの
あさけにて それかどばかり わすられぬ 面影をゆかしき

五段

咲き亂れたる ませのうちにて どこあつかしき あでしこの
もとの垣根を 一人忘れず 心にかけて 去のべり

六段

かとりひに たちそふ 戀のけふりの 世とともに
絶えぬのはど ありぬるを 行方もえらぬ ねもひかあ

六玉川の曲 平調子

同

一段

いはでねもふ ことろの色を 八重にもし うつしそむてふ

つれあさに 春のつさげの 駒どめていさ 水かはむ山吹

二段

ねのが秋どや さほまかの まからむ花の すり衣
うつろふ波の むらさきに 亂れそめにし 去ら露

三段

かはどにつたふ 松かぜの 音だに秋は さびしきに
衣うつぎの かきもあれて きぬたもいどい いそぐある

四段

きのふの袖も はしやらで まだきぬれそふ 秋露に
涙もひかりを うちよせて さらすやまづか 手づくり

五段

汐風として 夜もすがら つきもみがける 川波に
くだけてものを ねもひねの 夢をさそひて 鳴く千鳥

六段 ぞかへる鷹の 山ふかみ 鹿はあらしの ことがらしに
 流るゝ水の あのみして 氷もむすぶ ばかりあり

浮舟の曲 平調子

同

一段 ねもふこと いばてや遂に やましろの 宇治のわたりの
 うきせにも沈は はてぬ行方こそ あか／＼ありし うらみかふ

二段 うきよをわたる まばぶねの ぬれ／＼て さす棹の
 まづくを見れば いつとあく 物思ふ袖の かくばかり

三段 身と分るとは難しや 玉くしげ ふたみちかくる わりあさに

ねもひみだれて うちかへす 心ひとつの くるしさよ

四段 小野のすまひの ねのづから さこえやありと つましく
 峯のあらしや さほしかの 聲にもたてず ありにけり

五段 いにしへの ふたうたあらで みにとあく 心もかしの
 手あらひは 徒然ある日ぐらし きのび／＼の あみだあり

六段 田のもの秋に ありぬとや 稻葉にまじる をどめ子が
 聲はをかしう うちそへて うたへばさらに 雁ぞあく

四季戀の曲 平調子、後略 三橋 檢 按

一段 この一段と序といふ

物のあはれば　これよりぞ　まらざらましや　まらざらめ
時につけつゝ　うつることろ　いづれか思ひの　種あらむ

二段

いとよりかけし　みどりこそ　ねみだれ髪　れもかけ
あがめせしまに　色も音も　うつろひやすき　人でころ

三段

うすきあざけを　をりはへて　いとはかあくも　あきくらし
つとむにあまる　胸の火に　夜すがら身をや　こがすらむ

四段

としごどに　あふとても　ねる夜すくあま　ちざりかふ
歎けとてやは　てりそよる　かげぞちの　かあしき

五段

まごゝが上に　たばしるは　わかれの袖の　まらたま

思ひふるやの　軒につもる　うらみとけて　まのびね

以上十曲と中組といふ。別に、無歌の曲九段、七段、五段のまらへあり。

四季の曲 平調子 (是より以下十二曲奥組) 八 橋 檢 校

一段 (この一段と并といふ)

はるの春たつ　あしたには　日かげ曇らで　にはやかに
人のこゝろも　れのづから　のびらかあるぞ　よもやま

二段

春は梅に　うぐひす　つとじや藤に　山ぶき
櫻かざす　みや人　花にこゝろ　うつせり

三段

夏は卵の花　たちばな　あやめはちす　あでしこ
風ふけば　すどしくて　水にこゝろ　うつせり

四段 秋はもみぢ 鹿のね 千草の花に 松むし
 かりあきて 夕ぐれの 月にこころ うつせり

五段 冬はまぐれ はつしも あられみぞれ こがらし
 さえし夜の あけぼの 雪にこころ うつせり

扇の曲 平調子

同

一段 わふごは 櫻の三重がさね かすめる月を 繪にかきて
 水にうつるふ ことろばへ ゆゑあづかしき ありさま

二段 たそがれどきの まざれに はのく見えて 咲けるは

小家がちある 軒のつぎに 餘りてかゝる 夕がは

三段 むさし野も 更科も 須磨や明石の ねもかげも
 うつしてこゝに 見る月の あがめはいつも ひろさは

四段 夢にばかり よあく ねもふ人を みちのくの
 勿來の關を 誰がすゑて うつゝにこども かよはず

五段 ○○○○○………
この一段は無歌に別にて越樂の名あり

六段 こひくゝて こひくゝて 戀しき人を まつち山
 待つらむものを 行きて見む ゆきてらむや あひみむ

七段

あかしかねたる　　まも夜の　　床も淋しき　　あらしの
音はそよ／＼　　さら／＼と　　降るはわれの　　たまごと

雲居の曲

雲居の調子

同

一段

ひとめまのぶの　　中あれば　　ねもひは胸に　　みちのくの
千賀のまはがま　　名のみにて　　へだてと身をぞ　　こがるゝ

二段

わするゝや　　わすらるゝ　　我身のうへは　　思はれで
あだ名たつ　　うきひとの　　末の世いかい　　あるべき

三段

たまさかに　　あふとても　　猶濡れまざる　　たもどかあ
あすのわかれも　　かねてより　　思ふあみだの　　先立ちて

四段

雨のうちつれ／＼　　むかしを思ふ　　をりから
あはれをそへて　　草の戸を　　叩くや松の　　さよかぜ

五段

身はうきふねの　　かぢをたえ　　よるべもさらに　　あらいその
岩うつ波の　　音につれて　　ちぢにくたくる　　こころかあ

六段

〇〇〇〇〇〇………
三の一段は無歌にして別
金のまらへの名あり

七段

雲居にひどく　　あるかみも　　落つればねつる　　世のあらい
さりどては　　わがこひの　　あどかは　　叶はざるべき

羽衣の曲

平調子

北野島兩家作者不詳

一段 君のめぐみは 久かたの 天のはひろも まれにきて
 までしいはほは そのまゝに 動かぬ御代の ためしかあ

二段 星をどあふる すべらぎの 雲の上まで のどかある
 あしたのけしき あらたまの 春日くもらぬ 天が下

三段 あらの小川の 夕かぜに 去らゆふかくる 波の音
 神のこゝろを すゑしめの みそぎぞ夏の えるしある

四段 よはひ久しき 山人の 折る袖にはふ 菊のつゆ
 うちほらひ うち拂ひ 千年の秋や ねくるらひ

五段

鴉カラスの海づら 見わたせば たぐひあみまに ありわけの
 月かげさえて 白妙の 雪をかけたる せたの橋

六段 萬代かけて 愛生の 松と竹との ふかみどり
 かはらぬ色は もろとも に 老せぬちぎり えるべし

若葉の曲

平調子、中半、雲居、後平調子

同

一段 ゆかりよしある 初草の 若葉の上を 見つるより
 いとゞ變らぬ 袖のつゆ 猶うきまさる 旅寐かあ

二段 うつゝあや ひとりね 夜半の枕に 吹きまよふ
 み山れるしに 夢さめて 涙もよほす 瀧のれど

三段 いざさらば 宮 人 に 行きて語らむ さくら花
 木の間のけしき ことあるを 風より先に 見せばや

四段 かくれが深き 奥 山 の 松のとほとを 縊に明けて
 まだ見ぬ花の かほばせを 見るよりぬるゝ ころも手

五段 たそがれ過ぐる をりから ほのかに見えし 花の色に
 迷ふころは 朝がすみ 立ちわづらふぞ ものうき

六段 いつしかに くみそめて 悔しと聞きし 山の井の
 浅きあがらも さりとては 絶えぬ契を たのまむ

思川の曲

雲居乙の調子

北島 生田 兩家 作者不詳

一段 あふせわたある ねもひ川 岩間によどむ 水ぐきの
 かきあがすにも 袖ぬれて ほす日もいつと きらあみ

二段 ねもかげの つくくど 忘れもやらで ねもひねの
 夢だに見えて わけぬれば わはでも鳥の 音ぞつらき

三段 いつのまにかは かきたえて 隔つる中と ありにけむ
 見し玉づさの もじが關と 名を聞くだにも うらめし

四段 つれあくも ゆく人を とどめがたみの 唐でるも
 たつよりいどい わが袖は 露にぞまほる まほるゝ

五段

戀ひわびて たゞひとり 伏屋の床に よもすがら
落つる涙は ねどあしの 瀧どやあがれ いづらむ

六段

あか／＼に つらからじ たゞ一すぢに つらからで
あさけのまじる いつはりど 思へば深き うらみかあ

橋姫の曲

平調子

この曲新古二種あり、今世に於ては、
傳ふるは三橋のつくるに、今世に於ては、
なり

一段

水のうへの うたかた 露にやどる いあづま
あるかあさかの 世の中を 宇治川の はしびめ

二段

身のうき時は 立ちよらむ 蔭とたのみし 推がもど

空しき里ど ありにける 契のほどぞ かあしき

三段

峯にたふる さわらび むかしの花の ねもかけ
忘れがたみに つみねきて ぬしあき宿に ねくらむ

四段

ささの世の ちぎりか この世のうちの あさけか
空しき跡と 宇治の里 絶えずこゝに やどり木

五段

一方あらぬ ものねもひ よるべ定めぬ うき舟
あだある名のみ たちばあのみ 小島が崎に こがるゝ

六段

小野の花の 秋のころ 閨のつまの 紅梅
それかどまがふ はあぞの むかしの人ぞ こひしき

新雲居弄齋の曲

雲居の調子

倉橋檢校

一段

月もろともにはとゞさす 鳴まてゐるさの 山の端見れば
はやみじかよも わけわたる

二段

またのあふせも いざさら露の あまりてねける 袖のうへ
げにも そでのうへ

三段

あはれはかき うき世の中に 共に絶えせぬ 契をぞ待つ
げにも 契をぞまつ

宮鶯の曲

平調子、後半曙

三橋檢校

一段 この一段と序といふ

華清の春の 朝がすみ 柳さくらの 色ふかく
錦のたもと かをり来て みゆきを待つぞ うるはしき

二段

宮のうぐひす 花に鳴き 軒の燕は あめをよぶ
うらやましきは 花のが身を 心のまゝに まかすらむ

三段

揚家をいでし そのいろに 君もこゝろを まどはされ
ひとりの外は 目につかて 遠ざくるこそ うらみあれ

四段

えらばれいでし 二八の春 うつされ来ては 六十の秋
空しき床に 老いはてゝ ねをのみあぐぞ あはれある

五段

ふようはる れどろへて 露のたま ひかりあし

今は見えじも 見えもせば うとき人には 笑はれむ

六段

壁にそむける ともし火の まだたき残す よはすがら

窓うつ雨の 音聞けば いととさへ ねられぬ

七段

壁へていはど はあどり 文につくり 詩にうたふ

今様すがた とりくの 中にわびしき たどひとり

三調の曲

一名春宮の曲
平調子中曙後曲
岩戸

石塚檢校

一段

春の夜のまの 風に吹き ひらく露井の 桃のはる

央あらざる 宮のまへ 月のかつらの 影たかし

二段

雲居の空に 君めづる 姿やさしき 舞姫の
夜や寒さどて めぐみそふ 花のにしきの 袂かあ

三段

まづけき宮の 窓のうち あやあく花の 薫り来て

うらみは長き 春の夜に 巻もえやらぬ 玉すだれ

四段

あこめに琴を いだきつゝ 月にむかへば ねぼろある

影さへやがて こがくれて ひどりのれあき 夜半の床

五段

池の美容も れよびあき 人のたもとに 吹きわたる

風のかをりは あかくくに 花よりもあほ かうばしき

六段

君があさけの 忘れられて すてぬ扇の 秋もふけ

かたぶく月の 夜もすがら みゆきを待つぞ はかあき

飛燕の曲

一名清平調子の曲
雪居乙の調子

安村 檢 技

一段

久かたの 雲のそで ふりしむかし 志のぼし
花にのこる 露よりも 消えぬ身ぞ はかあき

二段

世をてらす 志らたまの 數のひかり あらずは
天つ少女の かざしして 月にあそぶ あるらむ

三段

くれあゐの 花のうへ 露の色も 常あらぬ
夢はのこる よこぐも ふるは袖の 涙かあ

四段

あつかしや いにしへを 志のぶに匂ふ わがそで
ぬれてほす こすのどに おはれあれし つぼくらめ

五段

たぐひあき 花の色に こころうつす この君
うつろあき れもひこそ いととあはも ふかみ草

六段

散りやすき あらひとは よそにのみ きこし身も
うつろふは わがどが 恨むまじや 春かぜ

以上、十一曲と奥組といふ。別に、無歌の曲雪居九段のまらべあり。

箏曲の傳來

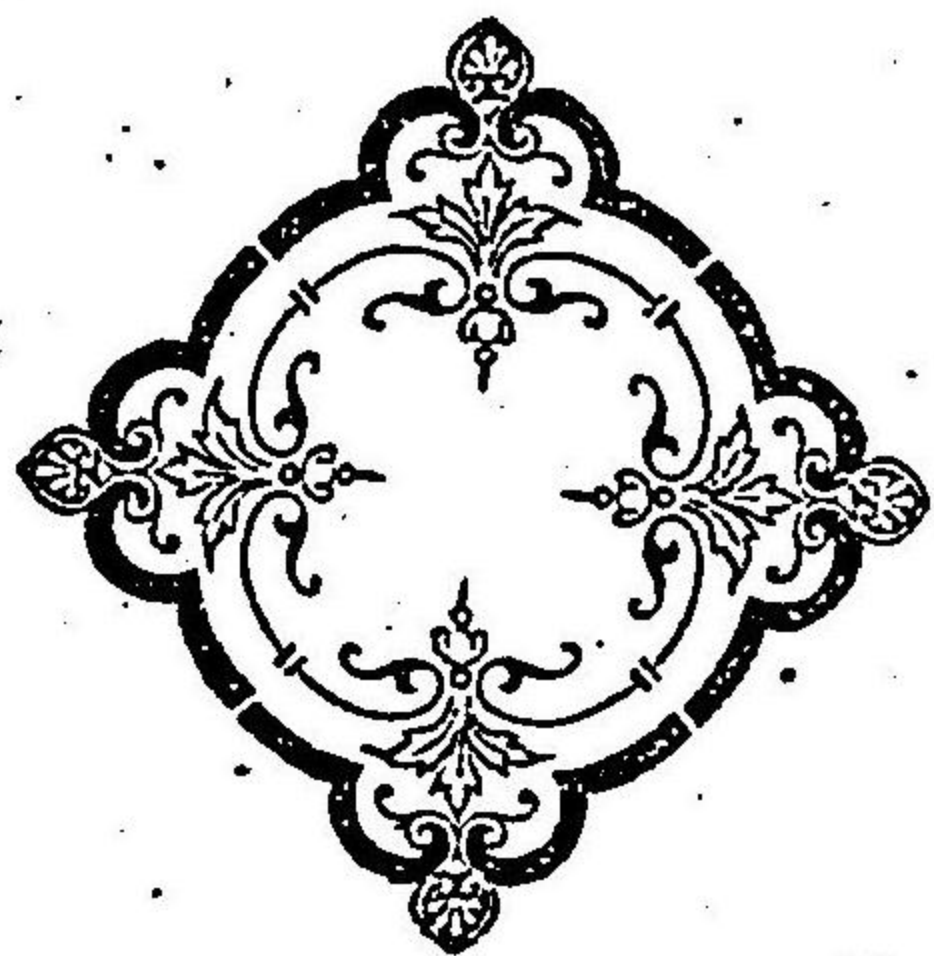
箏は、秦の蒙恬が造るところあり。古傳にいはく、上の圓きは天に象り、下の平あるは地に象り、中の空あるは六合に準へり、長さ六尺は律數に應ずと。またそのはじめ絃十二ありしは、十二ヶ月に擬せしものにして、後潤月を添へて、十三絃にあすといへり。即ち今の筑紫琴これあり。柱をば三才に象りて、高さ三寸に作りさす。今生田流にて用うる箏は、長さ六尺三寸あり。この半分の尺をとりて、三味線は作り初めしといへば、八橋の前より、六尺三寸を用ゐたりと見ゆ。箏を筑紫琴と稱するは、我國に渡りて、最初筑紫に於いて彈き始めたるがゆゑあり。箏は、これ元より琴の類あり。瑟の類と混ぜべからず。箏は二十五絃を分けて造れるとといふ説は、琴と瑟とを混じたる説あるべし。琴の類種々あり。瑟の類も種々あり。琴と瑟とは、制作方別れば、其のづから音も殊あるものと見ゆ。そは群

書要語に、琴は禁あり、邪を禁じ、以て人心を正しうするありと。また白虎通に、琴は樂を統ぶるあり、君子の御に當る所ありといへり。瑟は閉あり、忿を懲し、欲を窒く所以にして、人の徳を正しうするあり。瑟は絃多きに過ぎて、彈くに極めて不便あるべし。五十絃、或は三十六絃、また五十絃を分ちて廿五絃とあす類は、今の世には適せざるものあり。そも、琴は、伏羲氏に始れりといふ。琴書にいはく、伏羲氏天下に王として、桐を削りて琴とあす。長さは三尺六寸六分、また神農、舜帝、炎帝、みゑ五絃を用ゐしと見ゆ。後、文王、武王、其の、一絃を添へたりといへば、今の七絃はそれあるべし。さて皇國に於いては、神代よりはじまり、代々これを傳ふ。今古史成文を引きてあかしとあさむ。その書の二の卷に、天加奈止美命、與並天香弓六張、而爲緒、狹遠賀世、而其子長白羽命、左右之手持茅與菅、而奏之時、金色之鵝居、高幡之上矣。是倭琴之起。須賀加伎之縁也。といへり。そも倭琴ともしもいへるは、唐國の琴に對ひていふ名あり。また、あづま琴とい

ふは筑紫琴に對ひていふ名あるべし。そは筑紫は西にして、大和は東あるがゆゑに、まかいひそめしあらむ。源氏常夏の卷に、をかしげある和琴のあるをひきよせ給ひて、掻き鳴し給へば、律にいとよく調べられたり。
 (中略) ことくしき調もあしや、まどけあしや、このものよさあがら多くのあそびものゝ音拍子を、整へとりたるあむいとかしこきやまと琴とは、はかあう見せてきいもあくまきたることあり。(中略) あやしき山賊あどの中にも、まねぶもの數多侍ることあれば、恥しあべて、心安くやとこそ思ひ給ひつれ。さは勝れたるはさまことにや侍らむと、ゆかしげに切に心入れて思ひたまへれば、さかしあづまとこそ名もたち下りたるやうあれど、御前の御遊にも、まづ文のつかさをめすは、人の國はまらず、ことには、これを物の親とまたるにこそあめれどあるは、紫式部が考には、あづま琴とはいやしめたる名の如く思ひしさまあるが、自らもいふ如く、多くのあそびものゝ音拍子を、整へとれるものを、いやしむべきい

はれあし。又つま琴は、あづまことどのあを略きていふあり。琴は、支那にては、初より桐のみにて造れるものと見ゆれど、我國にては、杉にて造りしこともありと見ゆ。應神天皇紀の御歌に、訶羅怒鳥之寝瑛、柳枳之餓阿摩離、虚等瑛菟句離、柯枳譬句柳云々。このからぬの船は杉の木ありしと聞けば、桐のみあらず、杉にても造りしことありとぞまらるゝ。また琴をつくるに、その木を必ず焼くは、大に音に關係あることあるが、思ふに、からぬの琴より始れるものあるべし。さて箏をも琴をも、ふるく箏のこと、琴のことといふを見れば、我國にて、たゞことといふ時は、絃ある樂器の總名とあれり。

松本操貞一著



出雲の歌

由來組

出雲詣

中山琴主

旅の衣の	はるくと	行方もとほき	雲霧の
山また山を	越え過ぎて	神有月も	名にしれふ
出雲の國に	着きにけり	<small>ヲチコナ</small> 遠近の山路の松の	下葉まで
神風さそふ	聲すみて	實にありがたき	神の代を
思ひ出雲の	宮ぼしら	太敷立て	動きさるく
榮え久しき	四方八方の	くれあゐ深き	梢よ
まぐれてわたる	み山邊の	里も冬立つ	氣色か
			る

琴の由来

同

神さぶる 八雲の琴は やつめさす 出雲の國の
 八重山の 琴引山に 傳へたる 天の沼琴の
 いにしへを 今に移して 御柱の 二つの絲を
 かけまくも あやに尊き 須佐之男の 神の御歌を
 掻き合せ 謠ひそめしは 文政の 三年ふけゆく
 秋の空 杵築に詣て ゆゑよしを 大宮人に
 言問ひて 榮え久しき 君が代を ことはさまつり
 掻きあらす

松の齡

黒田 琴臣

出雲山 山松が枝は 春かぜの 吹きすさびても
 咲く花の 色香にまじり 千早ぶる 神の御さめの

遠長に 翫ばむと 玉くしげ 二絃の琴を

鶴龜の 齡によそへ 弾くぞ樂しき

三穂の浦

田口 眞恒

かきあらすその音を三穂の浦千鳥

八雲小琴にこゑあはすめり

神有月

佐草 春子

久かたの 天津神御の 御よさしの 命のまにま
 大己牟遲 神の命は 幽事を 志ろしめしつゝ
 どことばに 鎮りいます 八雲立 出雲の國に
 冬されば 神有月と 人みあも どあへ傳へて
 天の下 百八十國の 皇神も 神のことく

神つどひ 集ひ來まして 神事の 多ある中に
 綿津見の 神の宮ゆも 年のはに 御使主と
 杵築ある いあさの演に 浪のむだ かよりかくより
 うつし身の 顯しき神の 參來ます その幽事の
 みえわざは 綾に奇しく どもしきろかも

出雲の新嘗

永野貞厚

あさひこの 光たさす 出雲ある 琴引山は
 松が枝も 緑立ちそび 千早ぶる 神の御まめは
 うちあびさ 夕風すとし 千五百秋 瑞穂ゆたけさ
 新嘗の 神もゑらぎて 八雲立 出雲の國の
 造の 君が御前の 琴板に 皇神を
 よき日祭らむ 明日よりは おけの衣を け衣にせむ

多けふ 今もえらべて 百度の 榊葉とらす
 神歌の 聲も神さび 尊かりけり

功德組

歌垣曲

井口 實琴 琴翁

播磨ある まじむが建てし 新室に うたげせし時
 舞ひ奏つる その弟子の 詠には どりはくひれの
 手上には 丹畫着けつゝ 太刀が緒に 赤幡立て
 五十かぐる み山の三尾の 村竹の 本かさ蒨り
 末押し靡け さやくくに 八絃の琴を 調べたること

大社曲

中山琴主

國中に こゝはまた もつたいあくも 大八洲

大國主の	御由來	つばらに神代を	尋ぬるに
葦管植ゑるべ	作らし	萬國最初の	御國あり
兄弟誰ぞと	尋ぬるに	少御神の	二ぼしら
高皇産靈の	御子あり	戮力一心	七くしび
禁厭やむる	道清く	人草毛物に	至るまで
病を治す	功あり	諸國に薬師の	太祖神
山田の案山子に	言問へば	羅摩の船をば	漕ぎ寄せて
女濤男浪を	かどやかし	弓手にたかき	大神の山
女手は陸地て	三穗の關	波の穗遙に	見渡せば
むかし神人の	はめたまふ	餘國に穉る	八洲國
瓊々杵尊の	御世の時	宮は三十	二丈にて
まかも柱は	太しくや	千尋九く繩	百結び
高橋浮橋	相添へて	八重垣瑞垣	玉垣を

建立あらし	時よりも	ゆるがぬ杵築の	宮所
さるに依りて日の大神の勅あれば		日隅の宮と	いふとかや
これ大社の	由來あり	少御神は	小けれども
粟の垂穂に	はじかえて	常世の國へ	わたりまし
國をつくりて	たはします		

朝雨曲

中野正隆

八島國	妻まぎかねて	遠近の	くはし少女に
通ひけむ	神代ゆかしみ	さぬつ鳥	雉子はとよみ
庭つ鳥	かけてぞ思ふ	ぬばたまの	黒き御衣は
身にそはで	染木が汁の	まゆ衣	心にかゝふ
新まくら	うちとけやすき	沫雪の	まろき腕
玉手さし	いをしねれば	妬ゆひの	うさむつらさも

泣かずどは たどひいふとも やまどの 一本すゝき
うちあびさ 露もさ霧に たゞむ朝雨

御名讀

中條 信禮

千早振 神代のむかし 大八洲 うしはさまし
素盞鳴の 六代の御子の 御功績を 言擧すれば
水綿 綾にかけまく かしこくも 豊草原の
荒びしを 修り固めて たあつもの 瑞穂の國を
知し食す 大國主の 石根踏み 強暴たりし
草木まで 従服せれば 葦原の 醜男と崇め
國平に 突しゝ矛の 一すぢに 恵はひろき
八千矛の 神のみいさを 天の下 いゆき渡りぬ
人のため よかれとたてし みをしへに 今もかゝふる

御恩頼 皆畏めば 國つくり 大己牟遲といひ

たふどきや 此のれみねやの 言のまゝ 事終へませば

うつくしき 顯國魂 神行の 勝利給へば

大國の 魂とたゝへ 皇御孫の 命のまもり

和みたま 八咫の鏡に どりつけて 大和の三輪に

ましませる 大物主の 現身は 八坂の玉を

まどひ着て 八十の隈手に どこしへに 隠ひたまひ

幽事を 執り知しつゝ 玉菱鎮石 出雲の國の

大社 杵築の宮に 鎮りて 底つ岩根に

宮柱 太敷立てゝ 天の原 高知る千木の

高々に 仰がぬ人は あからまし 仰かぬ人こそ

あかりけれ

子功

八雲幾琴

堅洲國 大野が原の 苅萱の 穂中に立ちて
 八目さす 出雲燕矢 いくひもち 取持ち越ゆ
 千早ぶる 神もめでまし 現身の 人もどもしむ
 あかねさす 日の白鼠 吳竹の よの黒鼠
 日のまもり 夜のまもりと たいねずの 寝ずか守らふ
 若鼠の 寝ずかさちばふ 守らひて さちはへばこそ
 あがすまむまきり 内はほらく

須賀川

手事

青風曲共

佐須

草佐

梅園

琴造

いづも山松かぜ琴にかよひきて

須賀の川瀬とともにあふらしく

五節組

天津少女

中川長雄

そのかみ五節の 舞姫は 天武天皇 みよし野の
 吉野の宮にて 御琴を 弾かせ給ひし タぐれに
 俄に立ち舞ふ 白雲の とぼりかよげて 天降る
 天つ少女は 大前に やさしき聲に 少女ども
 をどめさびすも から玉を 袂にまきて 少女さびすも
 をだまさを 繰り返しつゝ 舞のそで 彼方へひらり
 此方へひらり ひらりくと 羽衣を ひるがへしたる
 ねもしろさ 五度舉げし 袖の香の 匂もつさず
 たちばあの 昔を去のぶ 大内に 菖蒲のねざし
 長さ世の ためしとありて 今の世も 絶えぬ五節の
 舞姫の まゐりの儀式 めでたし

浦分衣

下河邊宗琴

高き屋に	登りて見れば	大伴の	三つの浦浪
うちかすみ	げにあけぼのは	心あ	る人に見せばや
その名記して	難波瀾	鹽焼くまでも	にぎはふは
民のかまどの	夕けぶり	櫻の宮の	うつり香を
移しうゑけむ	九軒町	入り来る人は	大湊
こがね山あす	生玉の	光あらそふ	須磨明石
月のむかしも	忍ばれて	萬代よばふ	森の宮
龜井の水の	底ひあく	待ち戀ひぬらむ	住吉の
岸の姫松	我見ても	久しくありぬ	いざさらば
拾ひに行かむ	戀忘貝		

木の花

永野元信

唐土 <small>カラキ</small> の	人に見せばや	敷島の	倭島根の
さくら花	花の顔ばせ	いちしろく	吉野よく見て
よしといふ	人あらずとも	春風に	ちりかひ曇る
あださくら	あかね色香に	あくがれて	目もはるくど
菅の根の	永き春日を	情 <small>コト</small> あ	き身にもあはれど
えたひ来て	げに木の花の	さくや姫	咲くかひありて
草も木も	多かる中に	木の花の	花にまされる
花もあし	朝ゆふべに	時わかず	南の御階
天さかる	鄙の伏屋も	めではやし	一重に八重に
九重に	幾春かけて	咲か榮えむ	

吳竹

黒田琴翁

吳竹も 時や來ぬらむ 琴とあり 殊にうれしき
 この君の 清きこころを 音にこめて 直ある竹の
 一節に 二絃かけて ひきあらし 神を涼しめ
 君が代を 言賀まつり 若竹の 世々を重ねて
 調べ榮えむ

竹の都

西酒 村井 敬松 琴

君や來し 我や行きけむ 朧もほえぬ 夢か現か
 現か夢か 小萩が花の からにしき ちりつもらる
 とこあつを はらふ力も あよくと 亂れて伏せる
 女郎花 尾花の袖の せまければ 隠すとすれど
 朝顔の 露にやつれて 昔にかはる 今はあだあり
 藤袴 忘れがたみに ぬぎかけて とめし匂を

誘ひ來る 風にもあびく 葛の葉は 絶えぬうらみや
 残すらむ 竹のみやこの 名のみして はかあき秋の
 はあどの

安國曲

中 條 幸 琴

四方八隅 夷まつるひ ちらやすの 國ぞ樂しき
 神代より 天津日嗣の 高御座 君もよろづ代
 臣も千代 常磐堅磐の 岩まくら 苔むすまでも
 松の葉の 功正しき 敷島の 大和の國は
 くはし矛 千足事たり 何ひとつ かけしことあく
 ゆたかある 神の恵に 人みあの 麻とりむけて
 まつりする 昔あがらの 御手ぶりに 月日と共に
 明らかく 天地とむだ かがりあく 幾萬代も

榮えつさせじ

堅磐組

伊勢詣

鈴木榮琴

旅	で	ろ	も	今日	は	る	ノ	と	立	ち	出	づ	る	雲	を	ま	る	べ	に
車	路	へ		馴	れ	し	都	を	跡	に	見	て		名	残	つ	き	せ	ぬ
去	ら	川	や	瀧	つ	あ	が	れ	末	と	は	く		見	送	る	友	に	
い	つ	か	ま	た		行	き	あ	ふ	坂	の		關	路	あ	る		清	水
ま	ど	の	し	て		汲	む	さ	か	づ	き	に	遠	近	の		山	も	か
近	江	路	や		日	に	け	に	か	は	る		旅	の	そ	ら	武	藏	野
定	め	ね	ば		心	も	ひ	ろ	き				う	け	ひ	し	て	伊	勢
行	き	見	む	と		も	と	よ	り	神	に		う	け	ひ	し	て	伊	勢
こ	と	か	し	こ		め	ぐ	る	も	清	き		神	の	代	の		流	絶

宮	川	の	岸	う	つ	波	も	杉	の	名	も	高	倉	山	に
宮	人	の	神	遊	び	す	る	音	す	み	て	御	神	樂	う
聲	ぞ	樂	し	き											

神の都

御巫清直

渡	會	や	大	河	邊	に	行	く	水	の	行	き	て	か	へ	ら	ぬ		
年	あ	み	の	ま	た	う	ち	越	え	し	朝	か	ぜ	に	瀬	々	の		
解	け	そ	め	て		思	ひ	も	あ	げ	に	百	千	鳥	さ	へ	づ		
聲	ま	げ	き		岸	の	杉	村		一	し	は	の	緑	も	そ	ひ		
の	ど	か	あ	る	日	か	げ	に	あ	た	る	ぬ	ぎ	の	里	山	田		
時	め	き	さ	て	民	の	か	ま	ど	の	に	ぎ	は	し	く	か	し		
け	ぶ	り	さ	へ	高	倉	山	の	ふ	も	と	ま	で	立	ち	續	き		
春	が	す	み		神	代	を	と	ほ	く	隔	つ	ら	む	神	代	や		

隔ち行くらむ

治る浪

大 翠 邨

幾千代も	治る御代の	ありがたき	君が恵に
四方の海	八重の汐路も	ねだやかに	緑色そふ
浦松を	のぼる朝日の	ゆたけさや	神のをしへの
大らかに	人のこころも	ねのづから	やはらぐ國は
とこよゆく	唐國までも	またひ來て	貢 <small>ミツギ</small> の船の
綱手繩	長く絶えせず	まきあみの	伊勢の大神
守りますらむ			

百枝の松

八雲琴の舎千重琴主

豊受の 神の御園の 榊葉の 榮え久しき

神の代を	思ひ御池の	すとしさに	百枝の松の
色そひて	清きめぐみの	深みどり	立や岩戸の
春がすみ	高天の原の	朝けしき	晴れ渡りたる
天地の	光くまあき	月よみの	さやけく照す
君が代の	並うつくしき	姫小松	河邊につく
青柳の	靡くすがたを	引きわけて	そよふき渡る
濱荻の	さわだつ風と	もろどもに	打出の濱の
浪間より	渚によする	もしほ草	二見の浦の
沖つ玉	千尋の海の	底よりも	ゆたかに出で
昇る日の	富士の高嶺に	影を移せり	

五十鈴川

新 宮 涼 琴

身そぎしてみもすそ川の底きよく

こゝろぞすめる神垣のうち

神路山

中山琴主

いはまくも	畏けれども	天照す	日の大神の
宮ばしら	太敷立て	天地の	その初めより
すめろぎの	御世をまもりの	神路山	千枝の杉の
並立ちて	流つきせぬ	五十鈴川	深き色そふ
鳩口の	紅葉を照す	朝日山	輝きわたる
宇治の橋	遙にわしの	高根より	鼓が嶽を
うちあがめ	音無山を	右手に見て	登り下りの
坂中に	弾く絲のねも	うかれめの	立ち舞ふ袖の
たわやかに	そろふ拍子も	あひの山	あはぬまらへの
あどやさき	行きかふ人の	絶問あく	山田にかよふ

小田の橋	霞も晴れて	宮崎に	昔をうつす
櫻木の	實ばえの花は	九重の	春のにしきに
まさりけり			

常磐組

御代の榮

八

雲揚琴主

高ひかる	日の大神は	いはまくも	かしこけれども
天の原	知し食すぞと	誰もしる	その皇御孫の
大君は	豊葦原の	主とまし	戎國や天竺の
えびすをも	皆まつろひて	天の下	天津日嗣と
ありたまひ	かれ統 ^{スヘ} 君 ^{ヲキ} と	仰ぐあり	その大君の枝
御子のくの	八十續受けつがひ	御末かしこく	降ちたる
世の亂をば	ことむけて	二荒 ^{フタアラ} の山に	宮ばしら

太敷立てし 御功徳は 天津雲居に 高知りて
 かゝる例も タマシ あらがねの 國の御柱 動きあゝく
 君をまもりの この君の 直ある竹の 世々長く
 惠をあふげ 武夫の 八十字治川の 川水の
 流はつきじ つきせじと 世を人ごとに 言はぎて
 君に背かぬ 神の道 神習ひたる 日の本は
 幾萬代も 末どほく 治る御世こそ たふとけれ

飛鳥山

坪内好琴

げにや名に 聞きし 寂光の都 喜見城
 かくやと思ふ 東あゝる 關もどざぬ 天の下
 草木もあびく 榮えかゝる 不二のみ雪は ひかしより
 たゞ白妙に けだかくて 吾妻女の 癖あれば

いゆきはとかる 天雲のふすまに よりそひて
 春のひかりの あたゝかに 雪も氷も うちどけて
 流れむものを 人ごゝる 變ればかはる あすか山

千秋の榮 大田曲共

梶谷 詩 惡 琴

えら雲の れきて靡ける 民草の 千町の小田の
 八束穂に 賤がえわざは 神もうくらし 君もめづらし
 明がたの 苦屋にもるゝ 秋かぜの 身にまみくど
 いととあは 雲吹きまづめ 世の中を 千代ともあきて
 稻のあみ合手事 立ちても居ても 御世を祝ひ いつも千秋の
 榮え願はむ

宮城野

中山琴主

みちのくの	ゆかしき友と	みやこべに	かねて契りし
言の葉の	昔をまたひ	八雲立	出雲小琴の
二すぢに	靡く尾花の	露分けて	はるくこゝに
宮城野の	千草にすだく	蟲の音の	まらべそへたる
くさくさの	花の色香も	深まさり	深きあさけの
底きよく	すめる流を	汲みかはす	さゝの遊びに
長き夜も	はやあかつきの	かねてより	あふは別れの
はじめぞと	つげつゝ空に	飛鳥の	跡をまたひて
ゆく秋の	名残を床に	ねきの石	ぬれてかへさの
袖のうへに	ふるは時雨か	松かぜの	ねにのみあやに
残すらむ	音のみあやに	残るらむ	

千賀の浦

高申 津山 梅琴 琴主

はるくど	あゆみも遠き	陸奥の	千賀の烟も
鹽竈の	高き宮居に	参のぼり	仰ぐ神路の
ともし火の	光絶えせぬ	藤塚の	歌仙の庵に
もる月の	影をたのみに	宿まめて	あがめも長き
秋の夜の	更けて千鳥ぞ	鳴きわたる	野田の玉川
名のみにて	末の松山	波こさず	松が浦島
沖の石	海原廣く	見渡せば	籬が島の
霧ふすま	立ち並びたる	遠近の	島の氣色も
名にしれふ	松島かけて	詠めむと	蛸の小舟に
うち乗りて	心もかるき	浮島や	げにめづらしき
月見崎	霞が浦の	夕まぐれ	雄島小島の
松かぜに	通ふ八雲の	琴の音を	調べ残して
富山に	不二の高嶺や	金華山	四方の島々

浦々も みる前裁の たくみとやみむ

東の名残

中山 琴主

武藏野の	月を尋ねて	去年の春	来つゝあがめも
ありあけの	光のどけき	君が代の	長き根ざしを
かざりあく	言賀まつり	蘆の屋の	恵はふかき
八千草の	花にも葉にも	ねきあまる	露のあさけを
汲みかはし	ぬれて別るゝ	言の葉の	盡きぬ名残も
八雲立	出雲小琴の	清き音に	調べ残して
行く秋の	空澄みのぼる	月かげの	跡を慕ひて
東路を	遠くへだつる	信濃路や	洲羽の宮居を
伏し拜み	さそ川霧の	中分けて	今日九重に
立ちかへる			

上代組

高倉山

本居 宣長

豊受の	神のめぐみは	たふとさかもよ
命つ	うけの恵の	たふとさかもよ

庭津鳥

孝 譽 可 雲

あかどきと	夜やありぬらむ	庭つ	鳥	かけると鳴きぬ
うれしくも	鳴くある鳥か	この鳥の		鳴かずてあらば
いつをしも	晝としわかむ	いつをしも		夜とは去らむ
唐人の	つくれるばかり	時守が		さあす鼓も
ねほよその	ねしあてあれば	天地の		ねのつからある
汝時に	あにまさらめや	うべしこそ		神代のむかし

この鳥の 長鳴しとゆ 皇神も 御心とけて
 岩屋戸を 押し開かせば 四方の國 ところゆく問も
 益人の の くれし眼も 玄ぬのめの はがらくと
 明にあけたれ

宮の畔

神 隨 舍

宮のめのの 神のめぐみを 松かぜの 吹くや夕に
 絲竹の の 玄らへやさしき 舞のての の させる事あき
 わざまでも 雅調の神の の みやびとと 仰がぬ人は
 あからまし その直會の の 遊びにも 皆うちとけて
 中垣の の へだてもあらず かたらへば れのづからある
 魂まづめ 命を延ぶる 神事に 百千萬の
 よきことを 人にあたふる 神あれば ね多福と世に

字して 笑ふ門には 福きたり 家もゆたかに
 萬代のの ねかめの名こそ めでたけれ

岩戸開

嚴 櫃 本

明り立つ 天照國の 日の宮の 御門ねしはり
 天地の 底際の内に 高ひかる 日の大御神
 八束髪 佐須良の命 神性の の 荒びによりて
 石戸閉て 刺し隠らせり 八意に 思ひはかりて
 八百萬 神の招ぎしは 鎮に 魂に 祭のはじめ
 香山の の 五百枝賢木の 上枝には 眞玉をかけ
 中枝に 鏡を懸け 下枝に 木綿をとりしで
 御幣と いとり捧げて 太祝詞に 稱へ申せる
 神等のの 遊の庭に 香弓を 六つとりあへて

搔き弾くや	御琴につくり	香山の	竹の本末
うち切りて	御笛にまらべ	一二三四	五六七八
九十九	百千萬と	宇氣伏せて	踏みどろこし
天の原	揺るばかりも	謠ひ舞ひ	奏でたまへば
大御神	細目に開けて	みそあはす	御戸を開きて
石門破	その手力の	いさをしも	立ちける時に
天	携幡千幡	千々姫は	御手賜りて
大御身を	出し奉れり	天地の	常世往しも
遠炳く	光りかよひ	千早振	荒振神の
禍事も	除り盡さぬ	天てらす	日雲の命
天足し	至り遺さぬ	大御稜威	御恩頼し
並びあ	尊くありけり	あはれく	あまたぬし
あふれもしろ	あふさやけれけ	あはれく	天の鈿女の

神あそび

みかまけませる

神随あらし

天御柱

鈴木重兼

天の御柱	行きめぐり	神のむつたま	合ひそめて
かたみにのらす	あゑにやし	うまし契の	御心を
くみどにたこす	國つちに	めをのむつびの	中ばかり
誠あるものは	あかりけり		

天浮橋

頤神堂

かけまくも	綾にかしこし	いはまくも	ゆきしきかもよ
伊弉諾の	神のみことは	伊弉册の	姫大神と
天の原	浮橋の上ゆ	久かたの	天瓊矛を
さしれろし	かさあしませば	矛先の	潮もこをろに

左	右	御言舉して	にはくあぶり	大やまと	豊秋津洲
あゑにやど	男神はめぐり	國の御名はも	やはによし	越の島	筑紫の島
うみまし	御言舉して	伊豫二名島	八洲國	八洲國	次に大洲
百足らず	御言舉して	隱岐佐渡の島	足り行かむ	成り出づる	うみましより
二子あす	御言舉して	吉備の兒島と	成り出づる	敷萬の	神のみれもど
その次に	御言舉して	日月と共に	敷萬の	つまどひも	島の八十洲
天地や	御言舉して	次々凝りて	つまどひも	尊かりけり	天の益人
潮沫の	御言舉して	神の八十洲	尊かりけり	今神樂の	みちびかしけむ
知しめす	御言舉して	少男少女の	今神樂の	はじめある	まゐばしら
百千の	御言舉して	神代のむかし	はじめある		
浮橋の	御言舉して	仰かざらめやも			
學ばざらめや					

今様表組

倭琴

平田兼翁

倭玉琴は	高光る	日の大神の	岩屋戸に
籠らしし時	魔弓を	六張かきあべ	管をもて
かみでみいさめ	奉りしど	今神樂の	はじめある

天の沼琴

中山琴主

琴はいさあき	いさあみの	命にたこり	すさのをの
神にたまひし	久かたの	天の沼琴は	天の下
まらせる神の	そこたから	み寶ぬしど	いつかしき
神のまゐるしを	八千矛の	神にたまひし	詔琴の
そのいにしへの	あととひて	この二絃の	八雲立
出雲の琴は	つくりいで	尊きまらへを	ひきうつす

神づたへ

同

神のつたへの 二まぢの 出雲の神は いにしへの
 天の沼琴の 奇き音を 移してひろく 玄らべつゝ
 倭島根の うごきあき 御世をことほぎ 掻きあらす

琴の御霊

國造尊孫宿禰

八色の雲の 立つを見て 作らせりけむ 御言葉の
 三十字あまり 一文字に 掻き合せたる 二絃の
 琴はいざあき いざあみの 神の御霊や 籠るらむ

御よごし

北島出雲内孝宿禰

天の沼琴を うつすとふ 八雲小琴の 音を聞けば
 神の御琴の 木にふれて つちとるさし その音に

逐ひまかしけむ 御よごしの その古事ぞ 玄のぼるゝ

須佐詣

中山琴主

天の沼琴の まとます 須佐の御神を 拜まむと
 八重山ふかく まゐのぼり 神さびたてる 大宮に
 八雲小琴を 玄らべつゝ 神の御琴ぞ 玄のぼるゝ

小夜千鳥

和栗眞清琴

八雲たあびく すさの里 宮の尾山と 中山の
 中を流るゝ すが川に 聲もさやけく 夜もすがら
 鳴きて友よぶ さ夜千鳥 神代の歌や 玄らぶらむ

稲田の宮

御巫清直

稻田の宮の　　うしろどに　　八重のきぬ垣　　ねしはりて
 手玉もゆらに　　手弱女の　　搔き弾く琴の　　音をきよみ
 すがの湯山の　　させの葉を　　挿頭にさしてぞ　　舞ひあそぶ

二ばしら

島重胤

綾にかしこき　　大己牟遲　　少名彦名の　　二ばしら
 並ひ立して　　天の下　　造りたまひし　　御功を
 琴に作りて　　世の人に　　さどすもやがて　　神ごころ

國つくり

中山琴主

出雲の神は　　天の下　　うしはきまし　　御時に
 豊葦原の　　あしき神　　ことむけまして　　たあつもの
 民にたまひし　　神あれば　　朝よひをがみ　　まつるべし

神あそび

鶴峯戊申

出雲の國に　　神さぶる　　琴引山の　　いはやどの
 大國主の　　御琴に　　神代のまらべや　　のこるらむ
 げに玉垣の　　内つ國　　神あそびこそ　　樂しけれ

藥神

大膳翠郵

けたの崎ある　　白うさぎ　　鱒をあざむき　　ひたすやら
 皮をはがれて　　赤はだか　　大國主の　　御をしへに
 蒲の花しき　　まるべよと　　こゆはじめある　　醫業

海神曲

平岡松琴

杵築の宮に　　神々の　　集ひましける　　その中に
 海神よりの　　御使とて　　いゑさ小濱の　　浪を分け

年々龍蛇の まるきます 神有月ぞ くしびある

辨財天

古川龍琴

あきに名高き いちき島 渚にひかる 大宮は
あけくれ潮の 満干して 綾にたふとき 島姫の
御霊は琴を 掻きあらす 人のまもりと ありたまふ

若笑美須

田口龜子

事代主の 大神は 物のさかえを 三種の關
この浦浪に 竿たれて 綱をつらしと いはれより
あきあひ神と 天の下 あふがぬ人は あかりけり

萬代

出雲國麻呂宿禰

聲もかたちも くすはしき 二絃琴を 作り出て
調べはじめし 中山の 琴主こそは 琴の元祖
琴のひじりど よろづ代に 弾き傳へつゝ あふがまし

神代琴

島重老

神代の琴は 知らねども 君がえらぶる 八雲琴
その音を聞けば すがくし これぞ神代の 琴あらむ

縁むすび

佐草美清

かしこきかもよ 世の中の 吉事まもらひ 世の人の
縁まもらひ 八雲立 出雲にいます 大神の
結びたまへる 妹とせの 二絃の琴 たふとしあ

神と君

平岡雅足

八雲小琴は たまちはふ 神と君との 二すぢの
道をかけたる さまらべにて 世にたぐひなき ものぞかし

友がき

北島孝道

中山うしは みやびをの 友がきあるが 八雲てふ
小琴をつくり 神つ代の 尊きことを 二絃に
調べかゝるる そのさまらべ あはれもしろや あはさやけ

佐姫山

佐草文清

國引ましと ねみづぬの 神の命の みいさを
思ひ出雲の 浦あみの 打寄せかくる 長濱の
真砂の末に さまさびて 榮えたてり さひめ山

大宮所

梶谷琴翁

百八十神の 神つどひ 杵築給ひし 幽事の
大宮所 さまかれこそ 地震も海嘯も はばかりて
常磐堅態に 動きさゝく 秋津島根を 守りませ

琴の幸

中言林

天の沼琴を とりもたし かへり來まして 天の下
造り給ひき 琴は世を 常磐にまもる 寶かも
この二絃の 八雲琴 我もさまらべて 幸やえむ

うかの里

竹下孝裡

神の都は 幾千とせ 幾萬とせ ふりにけむ
大宮所 いやたかく 青垣山を めぐらして

物さびにたる 出雲路の うかの里こそ たふどけれ

出雲浦

佐草武清

いみさ小濱に 見わたせば 沖のとも島 つぶて島
さひめの山や 石見がた 波の千里の 遠近に
箏の小舟の ほのくど かすむ氣色ぞ たぐひあき

御手ぶり

北島榮琴

八雲小琴の 管スガ搔カキは いとすがくし 神つ代のの
この大國を 迄らせとて 傳へましけむ 神事の
そのいにしへの 御手ぶりも 思ひやられて たふとしあ

八雲の瀧

佐草春琴

妙タマシあるかもよ やつめさず 出雲の山の 松かぜも
瀧のひときも 通ひ来て 迄らべあはする 琴の音は
この大宮に かくります 神もたぬしと きこすらむ

いさみの浦

歌木榮琴

あまの小舟の いざり火は 浮きつ沈みつ 沖つ波
こがすばかりに 燃ゆれども 見るめ夜すがら 涼しくて
いさみの浦の いさみかも 夏てふ色は あかりけり

うつまかくれ

徳應静都琴

うつまかくれの ふた道を 二つの絲に かけまくも
かしてき御代の 神がたり 今のうつまに うたひ出で
あやにたへある 迄らべこそ かくりの神の 守るらめ

目の御神

久保季茲

八方に名高き 出雲ある 一畑山の 御薬師
 少御神の 御靈とて 民の眠の 盲しをば
 明くあはす 御功績と 仰がぬ人は あかりけり

九重の春

永野元琴

名にしにひたる 九重の 空ぞのとけき 四方八方の
 花のさかりを 詠めむと 山路も野路も 雲の上も
 錦かざして 雅人の ゆきかふ袖ぞ かをるらむ

八十の遊

高津梅琴

流絶えせず 加茂川の 岸の松風 通ひ来て
 八雲小琴に 調べそひ 齡をあがく 千代々々ど

友よびたてゝ 明くれに 千鳥も老を いはふらむ

あやすぎ

西村敬琴

げに九重の 名にたへる 平野の原の 綾杉は
 太しく高く 生ひまげり 神さび立てる たふとさに
 そのいにしへを まのびつゝ 八雲小琴に 搔きくらす

天の橋立

和栗小枝琴

生野の道は 遠けれど けふ大江山 ふみこえて
 海中に長く かけわたす 天の橋立 よさの海
 渚にひかる 本伊勢の 神のひかしぞ まのぼると

三輪詣

中山琴主

八咫の鏡に どりつけて 大和の三輪に 神づまる
 大物主の 現カミ身ミは 八坂の玉を 纏カミひきて
 八十のくまでに どころしへに かくろひますぞ 奇カミびミふる

みよし野

橋本田鶴琴

この日の本の よしの山 花のさかりは 玄ら雲の
 たと天地に たとよひて たあびさわたる 景色こそ
 もろこし人に ほこらむと みあ人々ぞ かたりける

和歌の浦

田中友榮琴

神の御跡を 垂れたまふ 名もれもしろき 和歌の浦
 そのまたむかし 海底の 汐シホ満ミツ玉タマの 浮ウび出デし
 島のがめも 今にあらは よしや葦邊に 鶴ツルぞあハく

住吉詣

山田春琴

岸の姫松 春ごとに 色うるはしき 深みどり
 とも住吉の 大神は 和歌の道しの ひじりどや
 ぬかづき仰ぐ かたそぎの 宮居はあはも 幾世へむ

三つの浦

三井高素琴

みつの浦浪 うちかすみ その名れしてる 難波津に
 咲やこの花 名もたかき 八雲小琴に すみの江の
 松のあらしぞ 通ひきて ちらべさやかに ありにける

須磨明石

西村三千琴

明石の浦に 船どめて 潮待宵の 月見れば
 須磨の松風 夜もすがら 八雲小琴に 通ひきて

まらべあはぢの 島どほく あはれ千鳥ぞ 鳴きわたる

金毘羅山

渡邊水琴

八方に名高き 象頭山 あやの松山 神さびて

あやに流るゝ 瀧川の 音も高松 八島がた

まど、つ田、鶴輪 白鳥の 宮居たふとく ふしをがむ

大三島

小野安瀧琴

大山積は あらがねの 國地をまもりの 大神あり

伊豫の三島に ましゝて この日の本を 異國より

ねらふ敵を むかしより 滅したまふ 御功あり

玉の浦

吉村浦琴

朝日かぶやく 玉の浦 出入る船の たえまゐく

いつも賑ふ 大みゐと 四方のあがめに ゆくりあく

時ぞうつれる くれの鐘 大寶山の 秋の月

太宰府

長岡久琴

筑紫の國の 太宰府の 梅の名にたふ 大宮は

あまみつ神の 御鎮り いともかほきき 君が代の

榮えを長く 益人の 書の守護と ありたまふ

高千穂

是枝生胤

萬千秋の 長秋に 豊葦原を 鎮めむと

皇大御神 八百萬 神に計らせ 皇御孫の

天降座しけむ 高千穂の くらふる嶽ぞ くしびある

笠沙の宮

前田 稻足

大國主に 幽事は 譲りたまひて 日の御子は
 笠沙の宮に 天の 下 ざるしめしけむ 宮どころ
 今は薩摩の 加世田とふ 卿の名にこそ さやかふれ

神の御陵

後醍院 眞柱

薩摩の國の 新田江は 我皇御孫の 御陵ぞ
 大隅の國 わひらねは 彦火々出見の 御陵ぞ
 あひらの鵜戸は 葺不合 神の御陵 いちじるき

吾妻くたり

中山 琴主

あれし都を あとに見て 名残盡せぬ 白川や
 瀧つあがれの 未どはく 雲吹きわたる 木枯の

風をたつ木に 鳥があく 吾妻の方にぞ 下りける

竹生島

明石 爲安 琴

瀬田石山の 秋の月 矢橋に三井の くれの鐘
 わはづや志賀の 松かぜを かたゝ小舟の 眞帆にうけ
 浪路たひらに 竹生島 神の御前に つさにけり

養老瀧

眞名井 千重 琴

老をやしあふ 瀧つ瀬の 音を入雲の 玉琴に
 掻き合せつゝ さく水の 名高き千代の 山ざくら
 あがめ涼しく 照る月を 朝日にうつす ふじの雪

高天原

中山 琴主

さかえ久しき 榊葉に 百枝の松の 色まして
 清きめぐみの 深みどり 立や岩戸の 春がすみ
 高天の原の 朝げしき 晴れ渡りたる 天の下

神路山

同

かしこけれども 天てらす 日の大神の 宮ぼしら
 太しく立てゝ 天地の そのはじめより すめろぎの
 御世をまもりの 神路山 流つさせぬ 五十鈴川

二見浦

同

二見の浦の 朝げしき 渚に寄する もしは草
 まきゑの松の 木の間より 浪路はるかに 見わたせば
 富士の高嶺に うつろひて 昇る朝日ぞ ゆたかある

富士の詠

同

出づる朝日と 暮るゝ日の たゞさし富士を うちあがめ
 原吉原に 宿えめて 磯邊にかよふ 松かぜと
 共にえらぶる 琴の音に 千代の齡や 延ぶあらむ

琴の利生

同

我須勢理姫 江の島の 辨才天の 廣前に
 調ぶる琴の 音につれて 青風かよひ 夏の日の
 夕立かゝる 涼しさぞ この島姫の 利生ある

鎌倉めぐり

吉田清琴

相摸の國の 鎌倉の 輝きわたる 鶴が岡
 八幡宮を 始めとし 名所舊跡 廻りつゝ

そのゆるよしを 郷人に 問ひて昔を 志のぶかる

金澤八景

石村榮平 琴

武藏の國の 金澤の 待宵月を 詠めむと
扇がいはに 宿りせし かひあく空に 雲立ちて
浦淋しくも 秋風の 音のみ一夜の 名残かる

金川臺

中山琴主

金川臺の 夕げしき 松の下いは もる月の
影をたのみに 宿まめて 海原とほく 見わたせば
げにれもしろさ 浪風の 志らべぞ琴に かよひける

武藏野

大膳亮きんち子

雲のうへある 咲く花も 色はかはら 月かげも
さやけく照す 武藏野の はてあく茂る 八千草の
恵のさせぬ 君が代の さかえを琴に 搔きくらす

忘れがたみ

中山琴主

月をたのみに 尋ね来て やどるかひあき 武藏野の
はてあく茂る 八千草の たぶるよくと 秋かせに
吹れてふせる 藤ばかり 忘れがたみに ぬぎてれく

盡きぬ別路

中條真左琴

山の眞清水 底ひあく 汲みて嬉しき まことには
千代もどあれし 今日までを あすより何と すがのねの
長さちざりを 頼めども 盡きぬ別の くるしさよ

雲の上

中條幸琴

神のめぐみに 幾千里 遠くへだちて あづまなる
 武藏の江戸に 榮えゆく 八雲小琴を 雲の上
 またひさかへし 都にも 盡さぬまらへぞ めでたかる

月の名残

松平田鶴子

峯の松風 夜もすがら まらべし琴の 糸たえて
 鳴く蟲の音も 冬がれし 千草の露に 移りゆく
 月の名残も 武藏野の 朝風のみぞ 吹きわたる

鹿島詣

大岸時琴

鹿島の宮に まるのぼり 東の海を 見わたせば
 浪路はるかに 出づる日の 光りかどやく 廣前に

八雲小琴の 音をきよみ 萬代長く 調べぬく

勿來の關

中山琴主

勿來の關の 山ざくら 見るめはてなき 海原の
 渚のいほに 行きくれて 磯邊の松の 葉がくれに
 かたふく月の 影にあは 我故郷ぞ 玄のぼる

宮城野

龍光院左太利

君ははるく みちのくの 我を尋ねて 宮城野に
 咲き亂れたる 萩の家の 月もる床に ぬく露の
 名残を琴に 引きとめ 玄らぶる身こそ かあしけれ

阿倍野

中山琴主

秋もふけゆく たそがれに あべ野の原を 見わたせば
 木々の梢も 錦 じて 千草の中に 鳴きわたる
 蟲の聲さへ たえくくに 荻吹く風の 身にぞまむ

野田の玉川

佐藤忠子

行方もどほき みちのくの 野田に千鳥ぞ 鳴きわたる
 末の松山 涙こさじ 千賀のけぶりも 鹽 竈の
 高き宮居に まるのぼり 八雲小琴を 掻きあらす

松島

石川石琴

富松島の 見わたしは 唐土までも 聞えたる
 霞が浦の 夕ばえに 女島を島の 夏げしき
 月見が崎の 秋のいろ 大高森の 雪のそら

金華山

歌木菊琴

名高き陸奥の 金華山 鐘をわひづに 山鳥の
 渡す小舟に うち乗りて うづまく涙を 漕ぎわたり
 辨才天の 廣前に 八雲小琴を 掻きまつる

日光詣

川口春琴

二荒の山の いたときは 大國主の 御まづまり
 麓に高き あづまてる 宮の四方八方 天の下
 かこやさわたる たふとさを あふがぬ人は あかりけり

諏訪詣

中山琴主

信濃の諏訪の 大宮の 廣前たかく 参のぼり

富士のみ雪を 詠めつゝ 調ぶる琴の 音とせもに
旅路のうさを 水海に 搔きあらすこそ うれしけれ

諏訪の元

諏方信古琴

たふとき諏訪の 大神の 御手に捧げし 千引石
今も出雲に ありと聞く つぶての鳥とぞ ありにける
そのかたしほの くだけもや この海てらす 小玉石

秋の宮

諏方貞政琴

空もまづけき 夜もすがら 搔きあす琴の えらべには
みさ山風や かよふらむ 海原てらす 月きよみ
秋の宮のの もみぢ葉を 挿頭カサシにさしてぞ 遊びける

津島詣

中山琴主

きその山路を はるくくと 尾張の國に かへりつゝ
熱田の宮ゆ 一の宮 津島にまうで 夜もすがら
この大宮の 廣前に 八雲小琴を 搔きあかす

龍田の御靈

龍野東一砂海

天地ひらけ その中に 目には見えねど 律シラベとよ
一つの物の 律りて よろづ聲ある ものにみあ
科戸シヤトの御靈 あらはれて 正風シマエ合すぞ くしびある

自のいにしへ

中山琴主

自のいにしへは 大オホ倭ヤマト 大比古命の 正流ナガレあり
八雲御神の 御惠の ふかき御靈を かこふりて

生れ出し我は 二 絃の 琴を作りし 琴の元祖

琴の守護神

宮城琴守

出雲の琴の 守護とます 青風大田の 二神は
人にあらはれ 詔言に 八雲の琴を 掻き鳴す
民のさかえを よろづ代も 守るとありて わりがたし

日本雅曲集終

明治廿六年三月十日印刷出版

正價金二拾錢

編輯者兼
發行者

野口竹次郎

日本橋區本石町一丁目九番地

印刷者

熊田宜遜

神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所

熊田活版所

神田區錦町三丁目廿五番地



版權所有

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

五上P-15

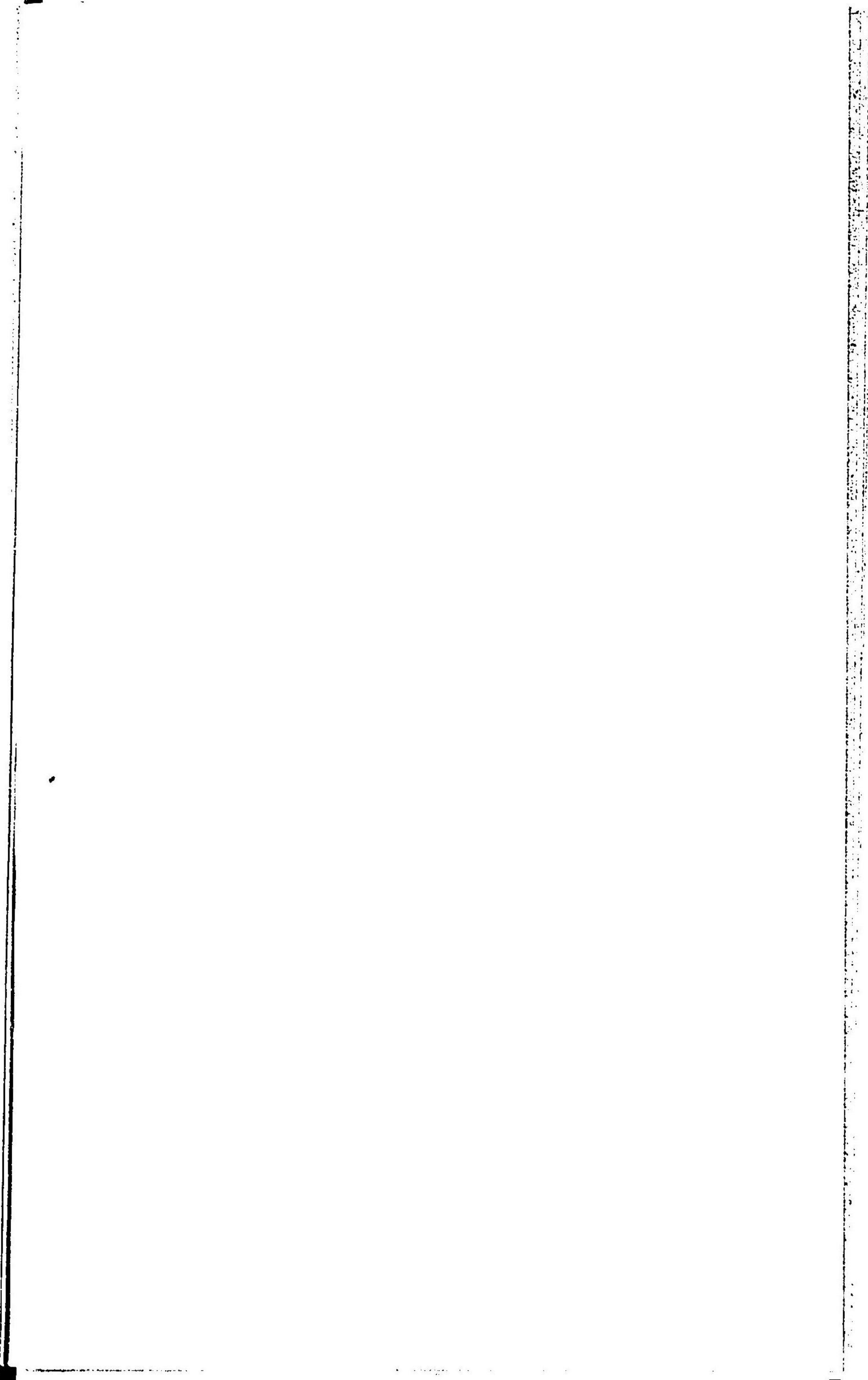
東洋文藝全書

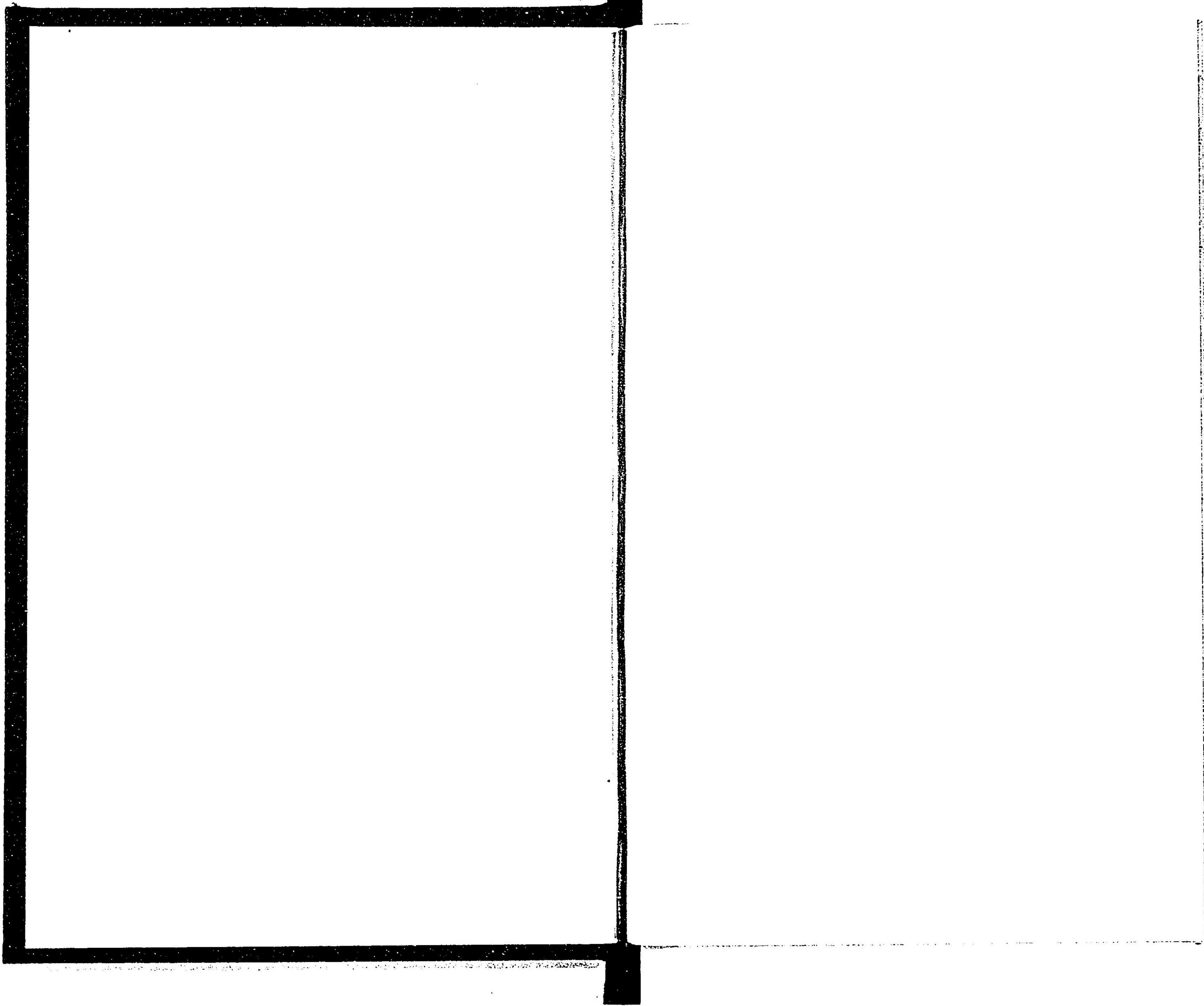
全部廿四卷紙數八千
頁以上一册三百頁以
上每編讀切洋裝美本

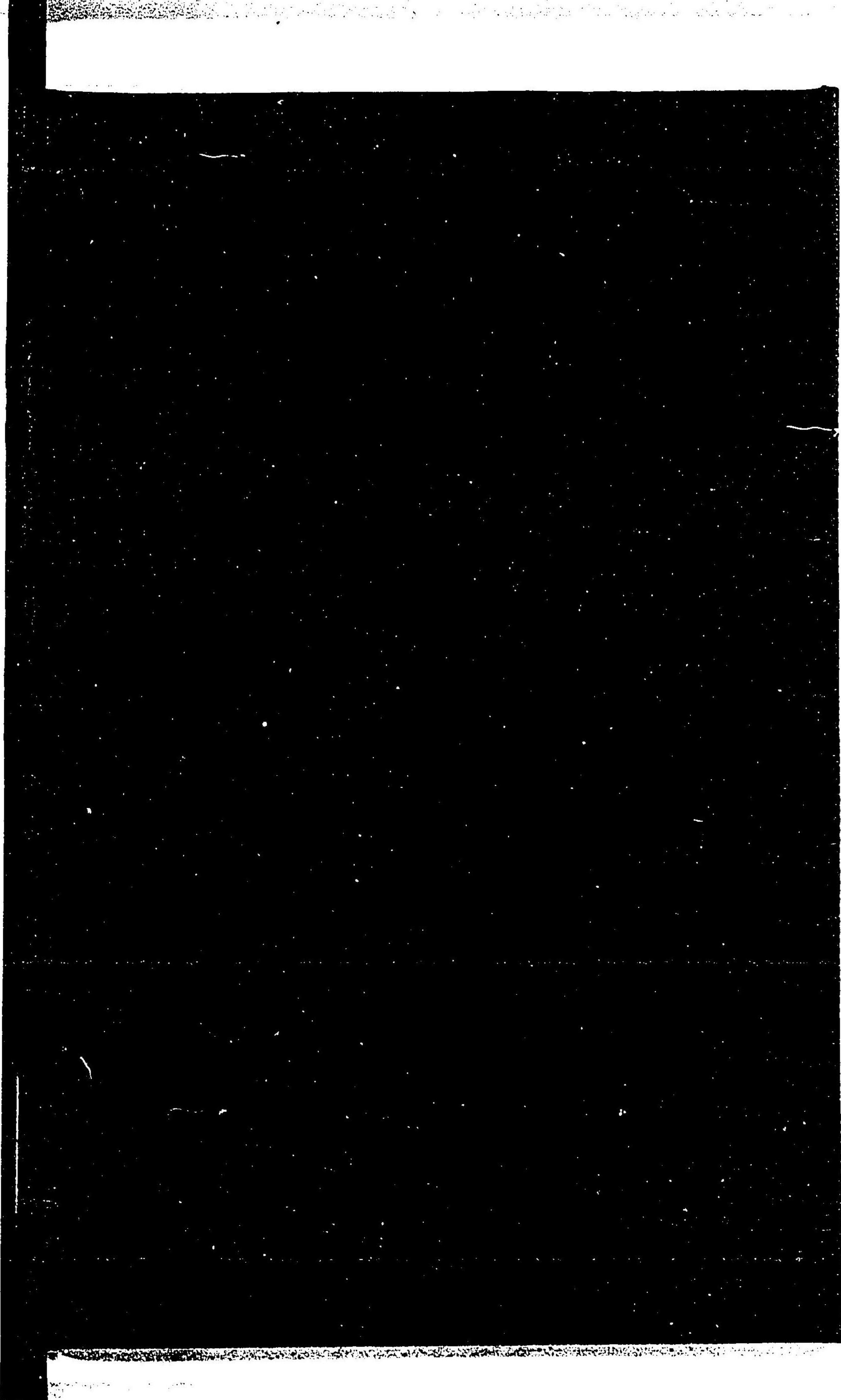
正價一册金二拾錢十二册前金二圓全廿四册前金三圓五拾錢郵稅一册二錢五厘
第十七編ヨリ郵稅一册六錢宛

目 總 書 本

第一編 千代田歌集 一編佐々木弘綱撰	第十三編 明治俳諧 一萬集 一編夜雪庵金羅撰
第二編 和漢名家詩集 全：松井 廣吉編	第十四編 日本名家詩選 全：佐藤 六石編
第三編 日本文範 上卷佐々木信綱撰	第十五編 古今狂歌狂句集 全：岸上 操編
第四編 日本文範 下卷全 撰	第十六編 都々逸獨稽古 全：藤原 道隆撰
第五編 和漢名家文粹 上卷北村 三郎編	第十七編 古今川柳一萬集 全：骨皮 道人編
第六編 和漢名家文粹 下卷松井 廣吉編	第十八編 名家尺牘文集 全：岸上 操編
第七編 古今名家戲文集 上卷三木 貞一編	第十九編 日本雅曲集 全：大宮 宗司編
第八編 古今狂詩大全 全：全 編	第二十編 義太夫拾粹 上卷岸上 操編
第九編 新選歌集 一編岸上 操編	第二十一編 義太夫拾粹 下卷全 編
第十編 新選代田歌集 二編佐々木弘綱撰	第二十二編 新撰俳諧一萬集 二編阿心庵永機撰
第十一編 新選歌集 二編岸上 操編	第二十三編 新撰代田歌集 三編佐々木弘綱撰
第十二編 古今名家戲文集 下卷全 編	第二十四編 明治新撰俳諧文集 全：大宮 宗司編







38
169

088159-000-4

38-169

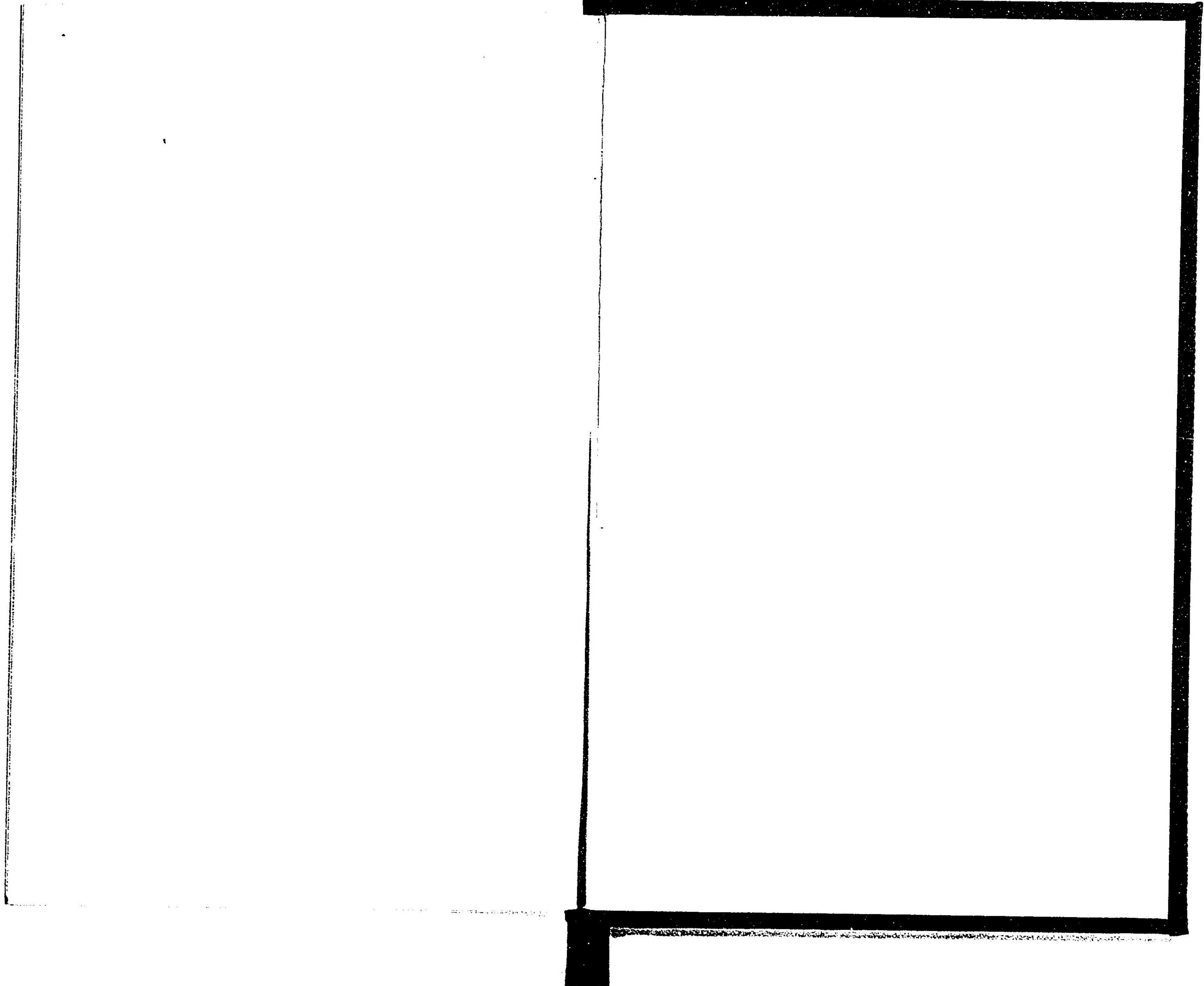
日本雅曲集

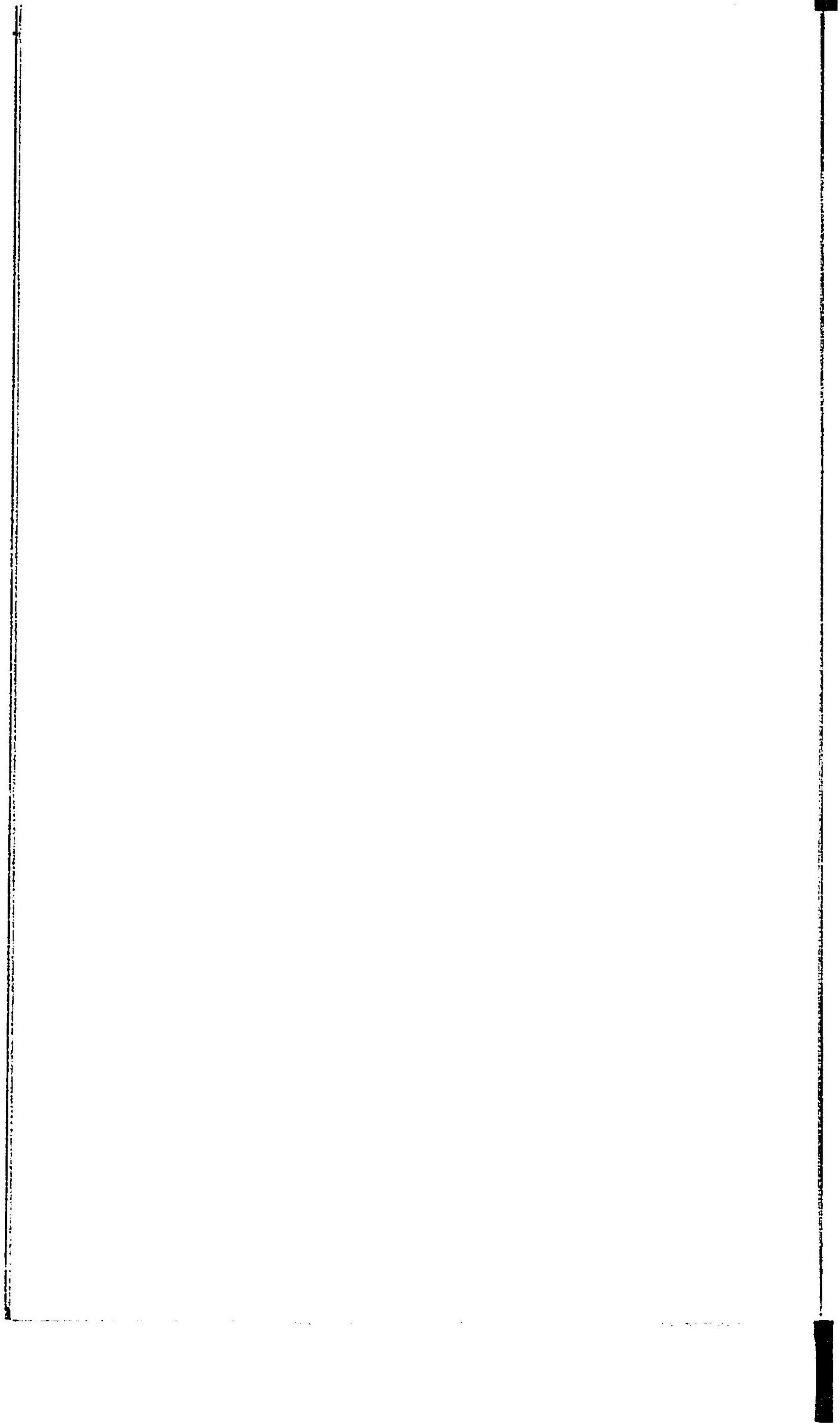
大宮 宗司/編

M26

DBH-0024







工ト2P-15



159

38
169